

大 藪 遺 跡

2011 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

大 藪 遺 跡

2011 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

歴史都市京都は、平安京建設以来の永く、そして由緒ある歴史を蓄積しており、さらに平安京以前に遡るはるかむかしの、貴重な文化財が今なお多く地下に埋もれています。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、昭和 51 年（1976）設立以来、これまでに市内に点在する数多くの遺跡の発掘調査を実施し、地中に埋もれていた京都の過去の姿を多く明らかにしてきました。

これらの調査成果は現地説明会、京都市考古資料館での展示、写真展あるいはホームページを通じて広く公開し、市民の皆様に京都の歴史に対し、関心を深めていただけるよう努めております。

このたび、道路整備事業に伴う大藪遺跡の発掘調査成果をここに報告いたします。本報告書の内容につきまして御意見、御批評をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当遺跡の調査に際して御協力ならびに御支援たまわりました関係各位に厚く感謝し、御礼申し上げます。

平成 23 年 6 月

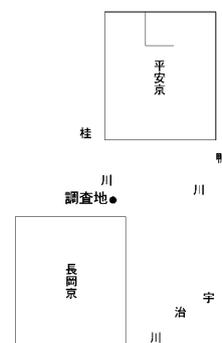
財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 大藪遺跡
- 2 調査所在地 京都市南区久世築山町地内
- 3 委 託 者 京都市 代表者 京都市長 門川大作
- 4 調査期間 2011年1月6日～2011年3月31日
- 5 調査面積 853.5 m²
- 6 調査担当者 山本雅和・田中利津子
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「久世」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した）。
なお、一部の図には旧座標を併記した。
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 種類ごとに通し番号を付し、写真番号も同一とした。土器類は番号のみとしたが、金属製品は「金」、石製品は「石」、木製品は「木」をそれぞれ番号の前に付けた。
- 13 本書作成 山本雅和・田中利津子
- 14 執筆分担 田中：1・2・4、山本：3・5、パリノ・サーヴェイ株式会社：6
- 15 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。
- 16 協力者 調査・遺物整理にあたっては、下記の方々からご教示をいただいた。
梅本康広・河角龍典・國下多美樹・
塚本珪一・中塚 良・萩本 勝

（敬称略 50音順）



（調査地点図）

0 2 4km

目 次

1. 調査経過	1
(1) 調査に至る経緯	1
(2) 調査の経過	2
2. 位置と環境	3
(1) 位置と環境	3
(2) 周辺の調査	3
3. 遺 構	6
(1) 基本層序	6
(2) 遺構の概要	6
(3) 第1面の遺構	7
(4) 第2面の遺構	12
(5) 第3面の遺構	17
4. 遺 物	20
(1) 遺物の概要	20
(2) 土器類	20
(3) 瓦類	24
(4) 金属製品	24
(5) 石製品	25
(6) 木製品	26
(7) 自然遺物	27
5. ま と め	28
(1) 遺構の変遷	28
(2) 大藪遺跡・大藪城跡の変遷	29
6. 付章 放射性炭素年代測定	32

図 版 目 次

図版1 遺構	1	北半部西側セクション断割断面（南東から）
	2	南半部中央セクション断割断面（北東から）
	3	南半部東側セクション断割断面（北東から）

	4	東部南壁断割断面（北から）
	5	西部南壁断割断面（北東から）
図版 2	遺構	1 北半部第1面全景（南西から）
		2 北半部第1面耕作溝・畦（西から）
図版 3	遺構	1 北半部第2面全景（南西から）
		2 南半部第1・2面全景（西から）
図版 4	遺構	1 溝 80（東から）
		2 溝 80・溝 105 合流部（北から）
		3 溝 105（北から）
図版 5	遺構	1 建物 2（西から）
		2 建物 1 柱穴 171 半截断面（西から）
		3 建物 1 柱穴 205 半截断面（西から）
		4 井戸 167（北から）
図版 6	遺構	1 溝 31・溝 39（南西から）
		2 溝 39・井戸 121（北北西から）
		3 溝 39 断面（南から）
		4 溝 39 土器出土状況（東から）
図版 7	遺構	1 土坑 115（南東から）
		2 土坑 225（北から）
		3 土坑 115 掘り下げ状況（西から）
		4 土坑 225 半截断面（北から）
図版 8	遺物	出土土器 1
図版 9	遺物	出土土器 2
図版 10	遺物	金属製品・石製品・木製品

挿 図 目 次

図 1	調査前全景（東南東から）	1
図 2	北半部作業状況（西から）	1
図 3	南半部作業状況（東から）	1
図 4	地元説明会状況（北西から）	1
図 5	調査区配置図（1：1,000）	2

図6	調査区および周辺調査位置図（1：5,000）	5
図7	北壁断面図（1：100）	7
図8	南壁断面図（1：100）	8
図9	セクション断面図（1：100）	9
図10	第1面遺構平面図〔江戸時代〕（1：250）	10
図11	第2面遺構平面図〔室町時代〕（1：250）	11
図12	建物1実測図（1：50）	13
図13	建物2実測図（1：50）	14
図14	柵1実測図（1：50）	15
図15	柵2実測図（1：50）	15
図16	井戸167実測図（1：40）	16
図17	第3面遺構平面図〔縄文時代〕（1：250）	18
図18	土坑115実測図（1：40）	19
図19	土坑225実測図（1：20）	19
図20	土器実測図1〔縄文時代〕（1：2）	21
図21	土器実測図2〔長岡京期から平安時代〕（1：4）	21
図22	土器実測図3〔室町時代後期〕（1：4）	23
図23	金属製品実測図（1：2）、銭貨拓影（2：3）	25
図24	石製品実測図（1：2、石4のみ1：4）	25
図25	木製品実測図（1：4）	26
図26	2010年度調査検出遺構平面図〔室町時代〕（1：500）	29
図27	遺構変遷図西半（1：2,000）	30
図28	遺構変遷図東半（1：2,000）	31
図29	暦年較正結果	33

表 目 次

表1	周辺調査一覧表	4
表2	遺構概要表	6
表3	遺物概要表	20
表4	溝80・井戸167出土植物種実等一覧表	27
表5	放射性炭素年代測定および暦年較正結果	33

大 藪 遺 跡

1. 調査経過

(1) 調査に至る経緯

今回の調査は、国道171号線と国道1号線を結ぶ都市計画道路（3・3・132 向日町上鳥羽線）整備事業に伴い実施した埋蔵文化財発掘調査（その3）で、2010年4月から11月にかけて実施した発掘調査（その1）（表1-15）・（その2）（表1-16）に引き続く調査である。調査地は、京都市南区久世築山町地内に所在し、『京都市遺跡地図』では大藪遺跡の東端および大藪城跡の東側隣接地にあたる¹⁾。

調査に先立ち、京都市建設局道路建設部道路建設課、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という。）、財団法人京都市埋蔵文化財研究所で協議し、調査区の位置の確定などの事前調整を実施した。



図1 調査前全景（東南東から）



図2 北半部作業状況（西から）



図3 南半部作業状況（東から）



図4 地元説明会状況（北西から）

(2) 調査の経過 (図1～5)

調査は調査区を北半部・南半部に分割し、北半部・南半部の順に反転してすすめた。北半部の調査は水路の仮設橋・フェンス設置などの付帯工事ののち実施した。重機で現地表面から0.2～0.3 mの黄褐色を主体とする層まで掘削し、その後は人力掘削によりすすめた。調査した遺構面は3面で、第1面では江戸時代の遺構を検出した。第2面では主に室町時代の遺構を検出するとともに、調査区東端では長岡京期の南北溝を2条検出した。これらは、長岡京の条坊に関連した遺構である可能性が考えられたため調査区外の一部を拡張し、溝の規模や心々間の距離を確認した。また、室町時代の東西溝底部で多量の炭層を検出したため、断割りを行ったところ、現地表下約0.9 mで炭片・焼土塊を含む土層を認めた。この土層の範囲を確定するため上面まで周囲を掘り下げ第3面として調査を行い、炭片・焼土塊を含む土坑を検出した。

南半部の調査は、仮設橋・フェンス付け替えなどの付帯工事ののちに実施した。重機で北半部と同じく黄褐色を主体とする層まで掘削し、その後は人力掘削によりすすめた。第1面・第2面は同一面となり、江戸時代から長岡京期の遺構を検出した。また、北半部で検出した長岡京期の溝の南延長を確認するために、拡張区を設定した。第3面では、北半部で検出した土坑に関する遺構の検出を目的として、セクション沿いの南北方向に3箇所、南壁沿いに1箇所の断割りを行い、さらに部分的な拡張を実施した。その結果、炭片・焼土塊を含む土坑1基を検出するとともに、断割土層中より縄文土器片を採集した。土坑の年代を知るために2基の土坑から出土した炭片について放射性炭素年代測定を実施したところ、ともに縄文時代の遺構であることが判明した。

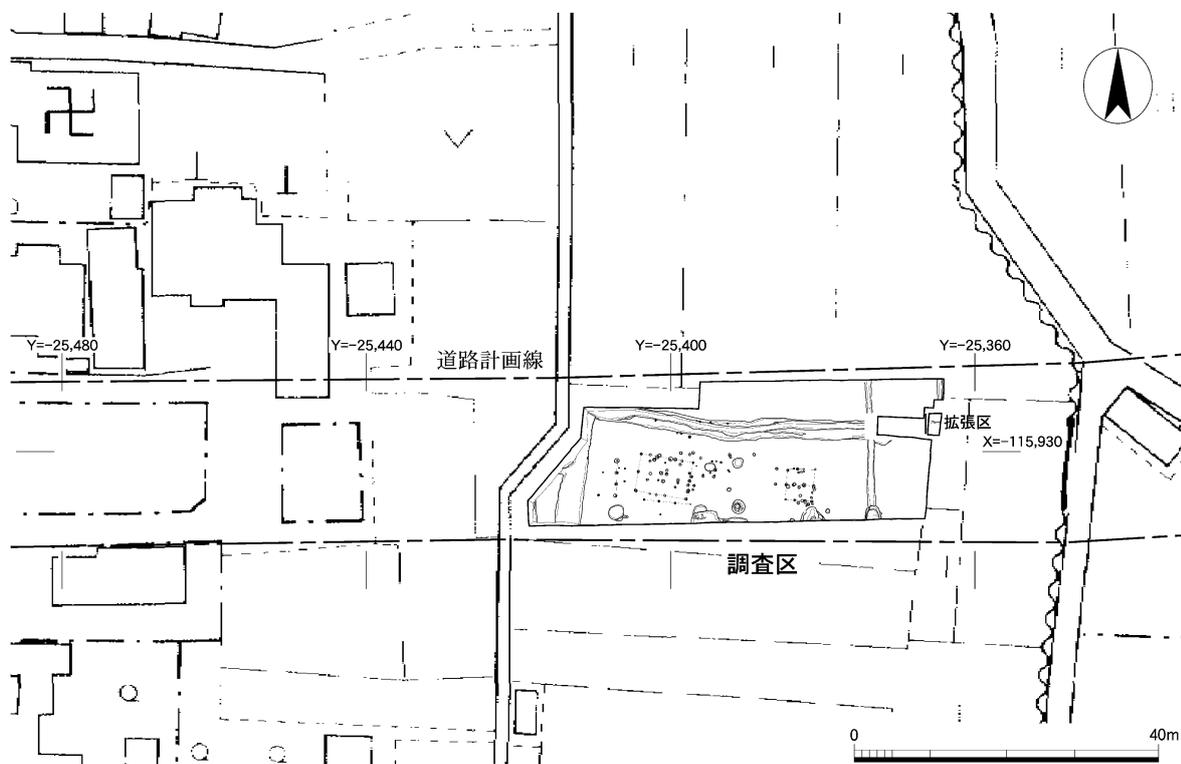


図5 調査区配置図 (1 : 1,000)

なお、掘削土はすべて調査地内に仮置きし、調査後に埋め戻した。その後、仮設橋・フェンスを撤去し、調査を終了した。

調査中は適宜、文化財保護課の臨検を受けた。また、当研究所の検証委員である鈴木久男氏（京都産業大学教授）、高正龍氏（立命館大学教授）の視察を受けた。また、調査中の2011年3月12日（土）に地元説明会を開催し、約50名の参加を得た。

2. 位置と環境

(1) 位置と環境

調査地は、京都市の南西にあたり、桂川西岸の久世築山町に位置する。築山の集落は、東は桂川、南は乙訓郡久我村（現伏見区久我石原町）、西は乙訓郡大藪村（現久世大藪町）に隣接した三角形の集落である。桂川の後背湿地に立地し、地形分類図によれば、谷底平野・氾濫平野に分類される²⁾。桂川沿いの肥沃な地域で、古代において開発がすすみ、中世には東久世荘とよばれていた。今回の調査区は、弥生時代から平安時代にかけての集落遺跡である大藪遺跡の東部で、中世の居館跡として周知されている大藪城跡東側隣接地にあたる。

築山の名は、文明三年（1477）の室町幕府奉行人連署奉書（『久我家文書』）や明応四年（1495）の桂川用水差図案（『東寺百合文書』）にみえる³⁾。また、調査地の北東には地元の有力者によって築山城が造営された⁴⁾とあるが、築造年代、存続期間など詳細は不明である。

(2) 周辺の調査（図6、表1）

大藪遺跡内で実施された発掘調査・広域の立会調査は、大藪城跡も含めて16箇所にとんでいる。

縄文時代の遺物は、1980年度の調査（表1-3）で地表下約2mで縄文時代後期の宮滝式の土器片が出土している。また、1983年度の調査（表1-5）で奈良時代から平安時代の流路内から縄文土器片が、1999年度の調査（表1-12）で弥生時代の河川の最下層から縄文時代後期から晩期の土器片が出土している。

弥生時代の遺構には、竪穴住居、方形周溝墓、流路などがある。竪穴住居は大藪遺跡中央部から西部・南部で検出している。平面形が円形のもの、方形のものがある。2007年度の調査（表1-14）で検出した竪穴住居には柱根が残っている。方形周溝墓は大藪遺跡の北部・西部・南部でそれぞれ検出している。

長岡京期の遺構には、祭祀遺構、流路、掘立柱建物、溝などがある。1972年度の調査（表1-1）では祭祀遺構から人面土器や土馬などが出土した。1980年度の調査（表1-3）では、東西溝を3条、1986年度の調査（表1-7）では溝、1997～1998年度の調査（表1-11）では掘立柱建物・井戸・柵・溝などを検出した。溝は南北方向で、東三坊坊間小路の北延長上に位置することから道路面の側溝の可能性はある。

表1 周辺調査一覧表

No.	調査種類 面積 (m ²)	調査期間	主な遺構	主な遺物	文献
1	発掘 100	1972.07.31 ～08.24	弥生～鎌倉：北西から南東方向の溝状流れ、杭列。奈良～長岡：祭祀遺構。	弥生中期～後期：弥生土器。古墳前期：土師器。中期：須恵器。奈良～長岡：土師器、須恵器、木製品、土馬、人面土器、馬の歯・骨など。平安：土器類、瓦。鎌倉：土器類。	梅川光隆『大敷遺跡発掘調査報告』1972 六勝寺研究会
2	発掘 130	1979.07.31 ～08.20	弥生：ピットおよび溝状の遺構。中世：溝5条。	弥生：弥生土器。	『京都市域における埋蔵文化財の発掘・試掘・立会調査一覧』1981
3	発掘 520	1980.12.04 ～1981.01.20	弥生：川1条、杭1基。長岡：溝3条。鎌倉：建物5棟以上(柱跡は約500基)、溝6条、井戸19基、土坑4基。	縄文：縄文土器。弥生：弥生土器、木製品、石包丁、石剣、石匙。古墳：土器類、木製品、有孔円板。長岡：土器類。平安：土器類。鎌倉：土器類、瓦。江戸：土器類。	平田 泰『大敷遺跡発掘調査概要』昭和55年度
4	発掘 180	1981.08.11 ～08.19	弥生～古墳：流路か。長岡：遺物包含層。	弥生～古墳：弥生土器、土師器、自然木。長岡：土師器、須恵器、瓦。	磯部 勝「大敷遺跡」『昭和56年度京都市埋蔵文化財調査概要(発掘調査編)』
5	発掘 341	1983.07.11 ～10.05	奈良～平安中期か：流路および流路に伴う杭列(杭列は奈良時代と推定)。	縄文：縄文土器。弥生後期：弥生土器。古墳：土師器、須恵器、管玉。奈良：土師器、須恵器、土製品。平安：土器類多数、人面土器、竈、瓦。鎌倉～室町：土器類多数、木製品。	堀内明博・鈴木廣司「大敷遺跡」『昭和58年度京都市埋蔵文化財調査概要』
6	発掘 157.5	1985.05.07 ～06.14	時期不明：流路、それに伴う杭列、土坑1基。	弥生：弥生土器。平安：土器類、墨書土器「浄」(須恵器)、瓦、木製品(人形・削りかけ・曲物)。中世：土器類。	上村和直・久世康博「大敷遺跡」『昭和60年度京都市埋蔵文化財調査概要』
7	立会 1335.5	1986.12.10 ～1987.07.21	弥生：土坑、溝、自然流路。古墳：自然流路。奈良：自然流路、杭列。長岡：溝。平安：土坑、溝、自然流路。鎌倉～室町以降：柱穴、土坑、溝(条里)。	弥生：弥生土器、木製品(盤・栓)。古墳：土師器、須恵器。奈良：土師器、須恵器、製塩土器、木杭。平安：土器類多数、瓦、木製品(曲物底部)。鎌倉～室町以降：土器類多数、木製品(下駄)。	吉崎 伸「大敷遺跡・中久世遺跡」『昭和62年度京都市埋蔵文化財調査概要』
8	発掘 485	1987.05.25 ～06.27	弥生後期：竪穴住居。奈良：自然流路、護岸施設。鎌倉～室町：濠、小溝、土坑。	弥生：弥生土器、石製品、柱根。古墳：土師器、須恵器。奈良：土師器、須恵器、黒色土器、木製品、杭。鎌倉：土器類、木製品(漆器)。室町：土器類。	鈴木廣司「大敷遺跡」『昭和62年度京都市埋蔵文化財調査概要』
9	発掘 172	1988.10.29 ～12.01	鎌倉～江戸前期：掘立柱建物3棟、井戸3基、土坑、溝、柱穴。江戸中期：柱跡(柱穴・根石・礎石)、土坑、溝。	鎌倉：土器類。室町：土器類、金属製品(包丁)。桃山～江戸：土器類、金属製品(キセル)。	吉崎 伸「大敷遺跡」『昭和63年度京都市埋蔵文化財調査概要』
10	発掘 980	1990.01.05 ～03.23	弥生後期：竪穴住居4棟、方形周溝墓、土坑、濠、溝、湿地状落込。古墳前期：竪穴住居。古墳前期～中期：掘立柱建物、土壙墓、土坑、溝、小柱穴。長岡：総柱建物(倉庫)、掘立柱建物、柵。鎌倉～室町：土坑、暗渠溝。江戸：土壙墓、土坑、暗渠溝。	弥生：弥生土器、勾玉。古墳：土師器、須恵器、管玉。長岡：土師器、須恵器。鎌倉～室町：土器類多数。江戸：土器類。	鈴木廣司「長岡京一条三坊・大敷遺跡」『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』
11	発掘 3925	1997.12.08 ～1999.04.15	弥生後期：竪穴住居、方形周溝墓。長岡：掘立柱建物、井戸、柵、溝。平安後期：井戸、溝。室町：礎石建物、掘立柱建物、井戸、堀、溝、土坑、河川。江戸：井戸、溝、土坑。	弥生：弥生土器、石剣、石鏃、鋤、柱根、ガラス小玉。長岡：土師器、須恵器、瓦、木製品、獣骨。平安後期：土器類多数、曲物、折敷、漆器。江戸：土器類多数、位牌、下駄、曲物、漆器。	西大條 哲ほか「大敷遺跡」『平成10年度京都市埋蔵文化財調査概要』
12	発掘 1700	1999.07.06 ～2000.03.21	弥生後期：竪穴住居、柱穴。平安後期：土坑。鎌倉～室町：掘立柱建物、井戸、土坑、堀、溝。桃山～江戸：掘立柱建物、井戸、土坑、堀、溝。	縄文後期～晩期：縄文土器。弥生後期：弥生土器。古墳：土師器、須恵器。奈良(長岡)：土師器、須恵器、瓦。平安：土器類多数。鎌倉～室町：土器類多数、土製品、木製品、金属製品、石製品。桃山～江戸：土器類多数、土製品、木製品、石製品、銭貨。	吉崎 伸ほか「大敷遺跡」『平成11年度京都市埋蔵文化財調査概要』
13	発掘 390	2006.11.16 ～12.08	弥生：方形周溝墓。平安：土坑、溝。室町以降：溝、建物。	弥生：弥生土器。平安：土器類。室町：土器類。	『中久世遺跡・大敷遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-19
14	発掘 295	2007.02.01 ～03.08	弥生後期：竪穴住居、溝、土坑、柱穴。平安後期：柱穴。鎌倉：柱穴。室町：建物、土坑、柱穴、溝、堀。江戸：溝。	弥生：弥生土器、石鏃、石剣、砥石、木製品(柱根)。平安：土器類。鎌倉：土器類。室町：土器類多数、瓦。江戸：土器類多数。	『大敷遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-32
15	発掘 760	2010.04.15 ～07.23	長岡：土坑。室町：建物、柵、井戸、柱穴、堀、溝。江戸：溝、柱穴、畦。	弥生：石鏃。長岡：土師器、須恵器。室町～江戸初：土器類多数、瓦。江戸：土器類多数、木製品、金属製品、石製品。	『大敷遺跡・大敷城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2010-9
16	発掘 411	2010.07.26 ～11.02	室町：建物、門、柵、井戸、柱穴、堀、溝。江戸：耕作溝、溝、柱穴、水路、土坑。	弥生：石鏃。長岡：土師器、須恵器。室町～江戸初：土器類多数、瓦、銭貨、木製品。江戸：土器類多数、木製品、金属製品、石製品。	『大敷遺跡・大敷城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2010-13

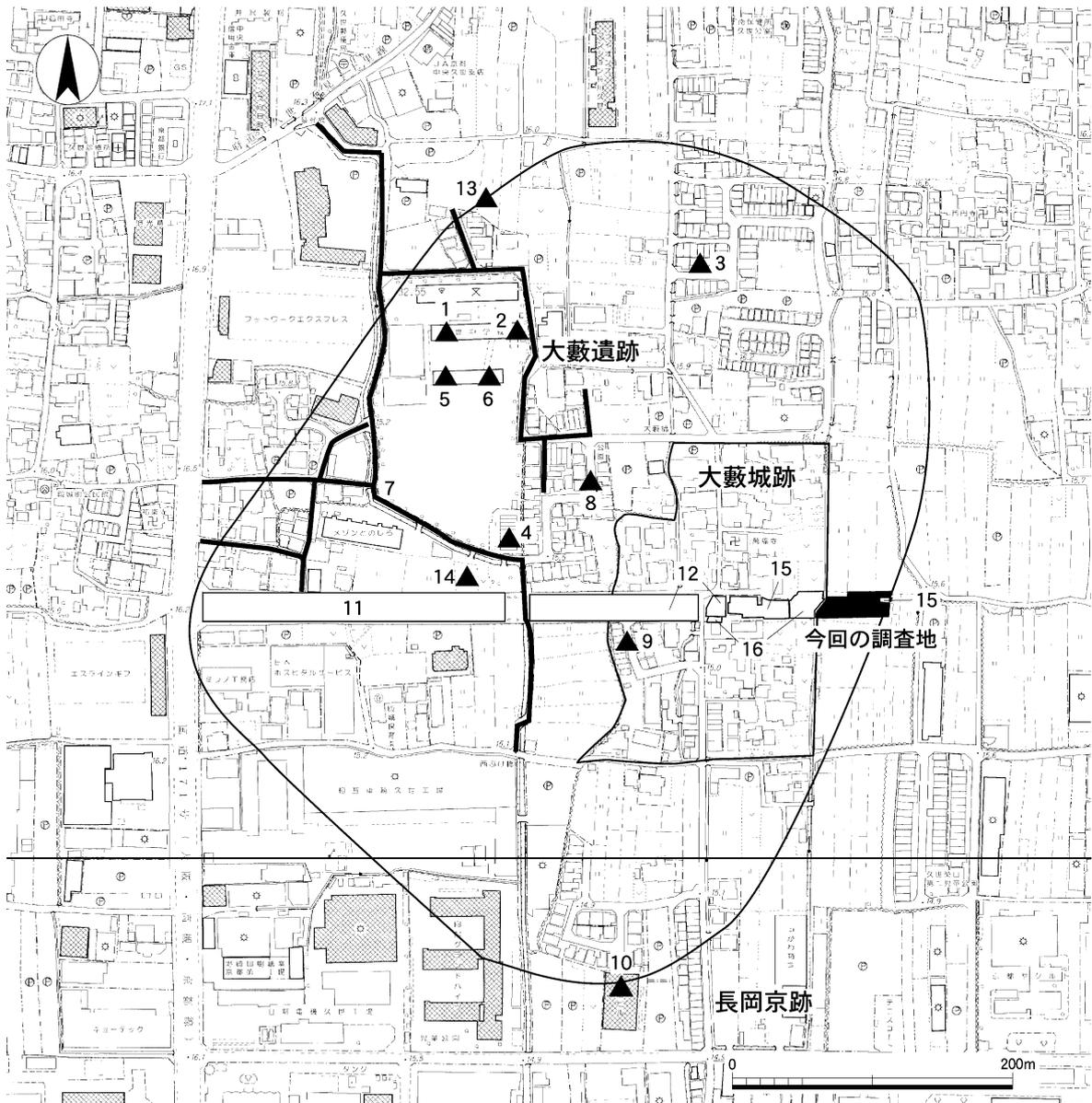


図6 調査区および周辺調査位置図（1：5,000）

大藪城跡に関連する中世の遺構には、掘立柱建物、柵、堀、溝、井戸、土坑などがある。1988年度の調査（表1-9）では、掘立柱建物3棟、井戸3基、土坑、溝などが検出されている。また、近世になっても整地を繰り返しながら、集落が継続して営まれ現代に至っていることがわかった。1999年度の調査（表1-12）では、東西4間×南北3間、東西6間×南北5間の2棟を含む掘立柱建物5棟、柱穴、柵、井戸、園池、溝、堀などが検出され、堀で区画された中に建物・井戸などが整然と配置されていることが明らかになった。調査地の西端で検出された南北方向の堀は、大藪城跡の西限の堀と考えられる。2010年4月から11月の調査（表1-15・16）では、室町時代の東に門をもつ柵に囲まれた南北4間×東西2間、南北1間×東西1間の掘立柱建物2棟、井戸、柵、柱穴、溝、堀、土坑などの他に、1999年度の調査で検出した区画溝と繋がる東西溝や掘立柱建物1棟を検出している。調査区東端で検出した南北方向の堀は大藪城跡の東限の堀にあたる。

3 遺 構

(1) 基本層序 (図版 1、図 7～9)

調査地は北から南に向けて緩やかに傾斜する地形にあり、現代の畦で段差となり南側が約 0.3 m 低くなる。段差の北側・南側とも調査地全域には約 0.2～0.4 m の厚さの現代耕作土が広がる。

現代耕作土の下層は、後述する東西方向の畦 85 で段差となり南側が約 0.2～0.4 m 低くなる。畦 85 南側は約 0.2～0.4 m の厚さの江戸時代の耕作土である黄褐色泥砂が広がる。また、畦 85 北側には江戸時代の耕作土は残存せず、厚さ約 0.4 m の黄褐色極細砂・黄褐色シルトとなる。

江戸時代の耕作土の下層は、室町時代の遺構の基盤層をなす厚さ約 0.3 m の黄褐色極細砂、厚さ約 0.3 m の明黄褐色粘土、厚さ 0.3 m 以上のにぶい黄橙色極細砂などとなる。調査区西部では黄褐色中砂などを埋土とする南北方向の小さな流路の痕跡を認めた。室町時代の遺構の基盤層をなすこれらの土層は桂川の氾濫堆物と考えられ、極わずかに西に向けて傾斜して堆積する。

(2) 遺構の概要

江戸時代以降現代までの耕作土下面を第 1 面、長岡京期から室町時代の遺構検出面を第 2 面、縄文時代の遺構検出面を第 3 面として調査を行った。また、包含層中の遺物は分層した層名に基づき採集した。

第 1 面では江戸時代の畦・耕作溝・溝を検出した。第 2 面では長岡京期の溝・井戸、室町時代の建物・柵・溝・井戸・土坑などを検出した。第 3 面では縄文時代の土坑を検出した。ただし、調査区北半部畦 85 より北側および調査区南半部では江戸時代の耕作による攪拌が深くまで及んでいたため、第 1 面・第 2 面の遺構は同一遺構面での検出となった。また、第 2 面の遺構は室町時代後期、次いで長岡京期の遺構がほとんどを占め、平安時代から室町時代中期の遺構は認めていない。

検出した遺構総数は 225 基である。ここでは遺跡を理解するうえで主要と判断した遺構を検出面ごとに報告し、調査地の歴史の変遷はまとめて後述する。

表 2 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
縄文時代	土坑115・225	
長岡京期	溝31・39、井戸121	
室町時代後期	建物1・2、柵1・2、溝80・105・218、井戸167・187、土坑68・126・162・168	
江戸時代	耕作溝、畦1・85、溝14、34・119・120	

(3) 第1面の遺構 (図版2・3、図10)

畦・溝・土坑・柱穴などを検出した。

畦1 (図9) 北部で検出した東西方向の畦で、東側・西側は調査区外に延びる。断面形は半円形で、長さ30.8 m以上、上部は幅約0.3 m、下部は幅約0.6 m、高さ約0.2 mである。にぶい黄褐色シルト・黄褐色シルトを積み上げて形成する。出土遺物はない。畦1の直上には現代の畦が位置を踏襲して作られており、南側は段差となる。

畦85 (図9) 北部で検出した東西方向の畦で、東側・西側は調査区外に延びる。畦1の南側に位置し、畦1よりも古い。北側を溝83に画され、南側は段差となる。黄褐色極細砂が削り出されて畦状に残存したもので、いわゆる「擬畦畔」である。断面形は台形で、長さ34.5 m以上、上面は幅約0.3～0.5 m、下部は幅約0.6～0.8 mで、南側での段差は約0.2～0.4 mである。2010年度(その1)調査2区のSL3にあたり、条里の坪境に位置する。

溝83 (図9) 北部で検出した東西方向の溝で、東側・西側は調査区外に延びる。畦85の北側に位置する。断面形は浅いU字形で、長さ30.5 m以上、幅約0.5～0.7 m、深さ約0.2 mである。埋土はにぶい黄褐色砂泥で、江戸時代の遺物がわずかに出土した。2010年度(その1)調査2区のSN2にあたる。

溝26 西部で検出したわずかに蛇行する南北方向の溝で、北側は攪乱され、南側は調査区外に延びる。断面形はU字形で、長さ13.8 m以上、幅約0.3～0.7 m、深さ約0.2 mである。埋土は灰オリーブ褐色泥砂で、江戸時代の遺物が出土した。

耕作溝群 (図7) 調査区各所で検出した。畦85の北側と南側で様相が異なる。北側では東西・南北方向の平行する溝群を検出した。南北方向が優位であるが、溝83・畦85に接合するものが多い。幅約0.2～0.5 m、深さ約0.1～0.2 mである。埋土はにぶい黄褐色シルトで、江戸時代の遺物が極少量出土した。また、東部の溝32からは長岡京期の遺物が混入して出土した。

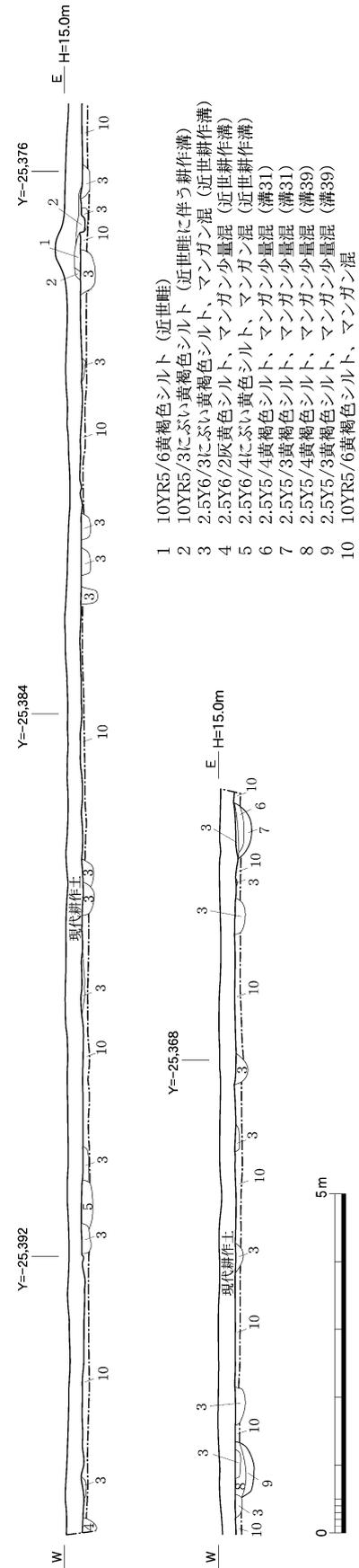


図7 北壁断面図 (1:100)

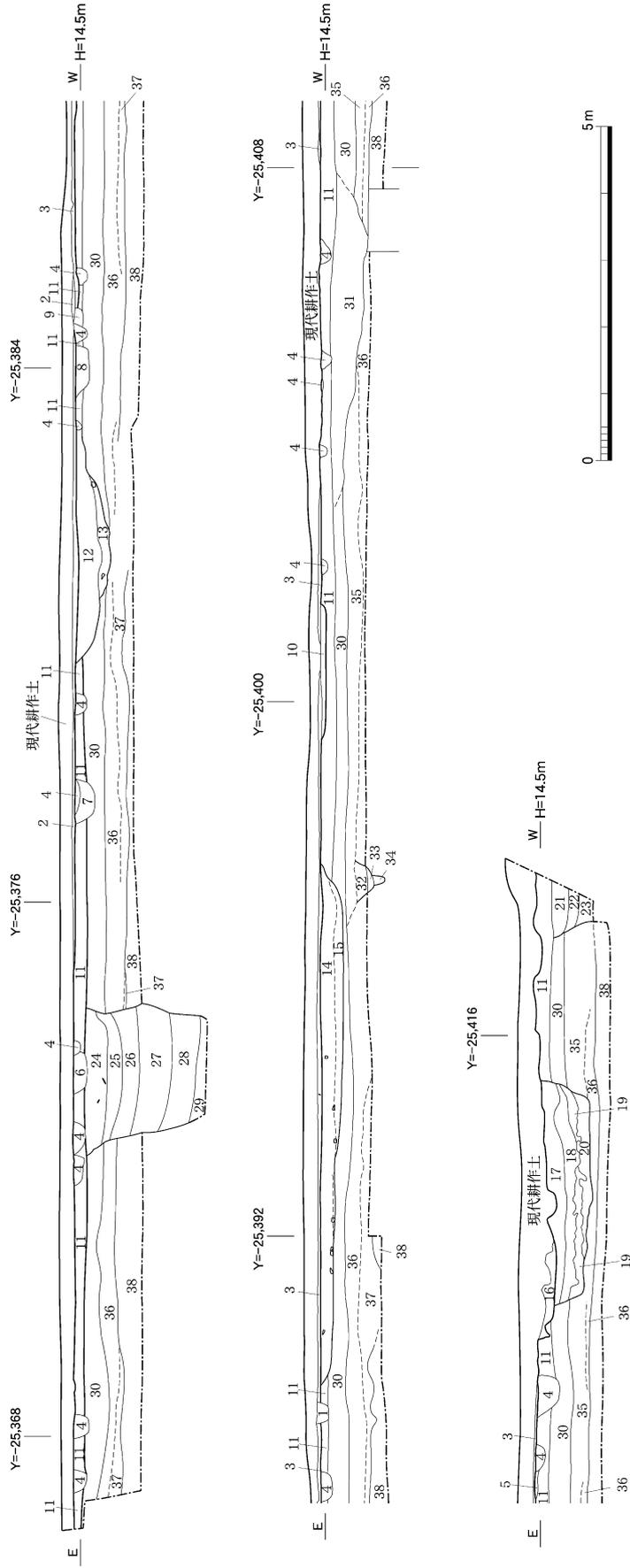


図 8 断壁断面図 (1 : 100)

- | | | |
|--|--|--|
| <p>1 2.5Y5/3黄褐色細砂、上面にマンガング混 (近世耕作溝)</p> <p>2 2.5Y5/4黄褐色砂泥</p> <p>3 2.5Y4/4オリーブ褐色細砂 + 2.5Y5/2暗灰黄色細砂</p> <p>4 5Y6/2灰オリーブ褐色極細砂 (近世耕作溝)</p> <p>5 5Y6/2灰オリーブ褐色極細砂、マンガング混</p> <p>6 5Y5/2灰オリーブ褐色細砂、粗砂、下層は細砂～シルト (溝122)</p> <p>7 2.5Y5/2暗灰黄色中砂～細砂、粗砂、下層は細砂～シルト (溝122)</p> <p>8 5Y5/2灰オリーブ褐色中砂～細砂、粗砂極少量混 (土坑152)</p> <p>9 2.5Y5/3黄褐色細砂</p> <p>10 5Y5/2暗灰黄色細砂、マンガング混</p> <p>11 2.5Y5/3黄褐色泥砂 + 10YR5/6黄褐色極細砂、マンガング混</p> <p>12 5Y5/2灰オリーブ褐色泥、粗砂～径0.5cmの礫・土器片混 (土坑126)</p> <p>13 5Y5/1灰色細砂～シルト、粗砂～径7cmの礫混 (土坑126)</p> <p>14 2.5Y5/3黄褐色細砂 + 10YR5/8黄褐色極細砂少量、土器片・マンガング混 (土坑168)</p> | <p>15 2.5Y5/3黄褐色シルト、マンガング混 (土坑168)</p> <p>16 2.5Y5/2暗灰黄色中砂～細砂、粗砂少量混</p> <p>17 5Y5/1灰色細砂、中砂混 (溝105)</p> <p>18 2.5Y5/2暗灰黄色中砂～細砂、径3～5cmの礫極少量混 (溝105)</p> <p>19 10YR4/1灰色細砂～シルト + 5Y5/2灰オリーブ褐色シルト混入 (溝105)</p> <p>20 5Y5/3灰オリーブ褐色粘土 (溝105)</p> <p>21 2.5Y5/1黄灰黄色細砂粘質、炭・土器片・マンガング混 (溝218)</p> <p>22 2.5Y5/2暗灰黄色細砂粘質、土器片混 (溝218)</p> <p>23 7.5Y5/1灰色シルト (溝218)</p> <p>24 5Y5/1オリーブ灰色細砂～極細砂、須臾器片混 (井戸121)</p> <p>25 2.5Y5/2暗灰黄色粘土 (井戸121)</p> <p>26 5GY5/1オリーブ灰色シルトに細砂互層混入 (井戸121)</p> <p>27 7.5GY5/1緑灰色シルトに細砂互層混入、炭混 (井戸121)</p> <p>28 5GY5/1オリーブ灰色細砂～極細砂～シルト (井戸121)</p> <p>29 2.5GY5/1オリーブ灰色砂礫 (井戸121)</p> | <p>30 2.5Y5/3黄褐色極細砂 + 10YR5/6黄褐色極細砂、マンガング混</p> <p>31 2.5Y5/4黄褐色中砂～細砂 + 10YR5/6黄褐色極細砂、腐植土、10YR5/2灰褐色シルト混 (流路)</p> <p>32 2.5Y5/3黄褐色粘土、炭・焼土混 (土坑225)</p> <p>33 10YR6/4にぶい黄褐色粘土、炭少量混 (土坑225)</p> <p>34 10YR5/4にぶい黄褐色シルト、炭少量混 (土坑225)</p> <p>35 10YR4/6褐色極細砂、マンガング混 + 2.5Y6/2灰黄色粘土ブロック混入</p> <p>36 10YR6/6明黄褐色粘土～細砂 + 2.5Y6/4にぶい黄褐色粘土</p> <p>37 2.5Y6/4にぶい黄褐色極細砂～粘土</p> <p>38 10YR6/4にぶい黄褐色極細砂～粘土</p> |
|--|--|--|

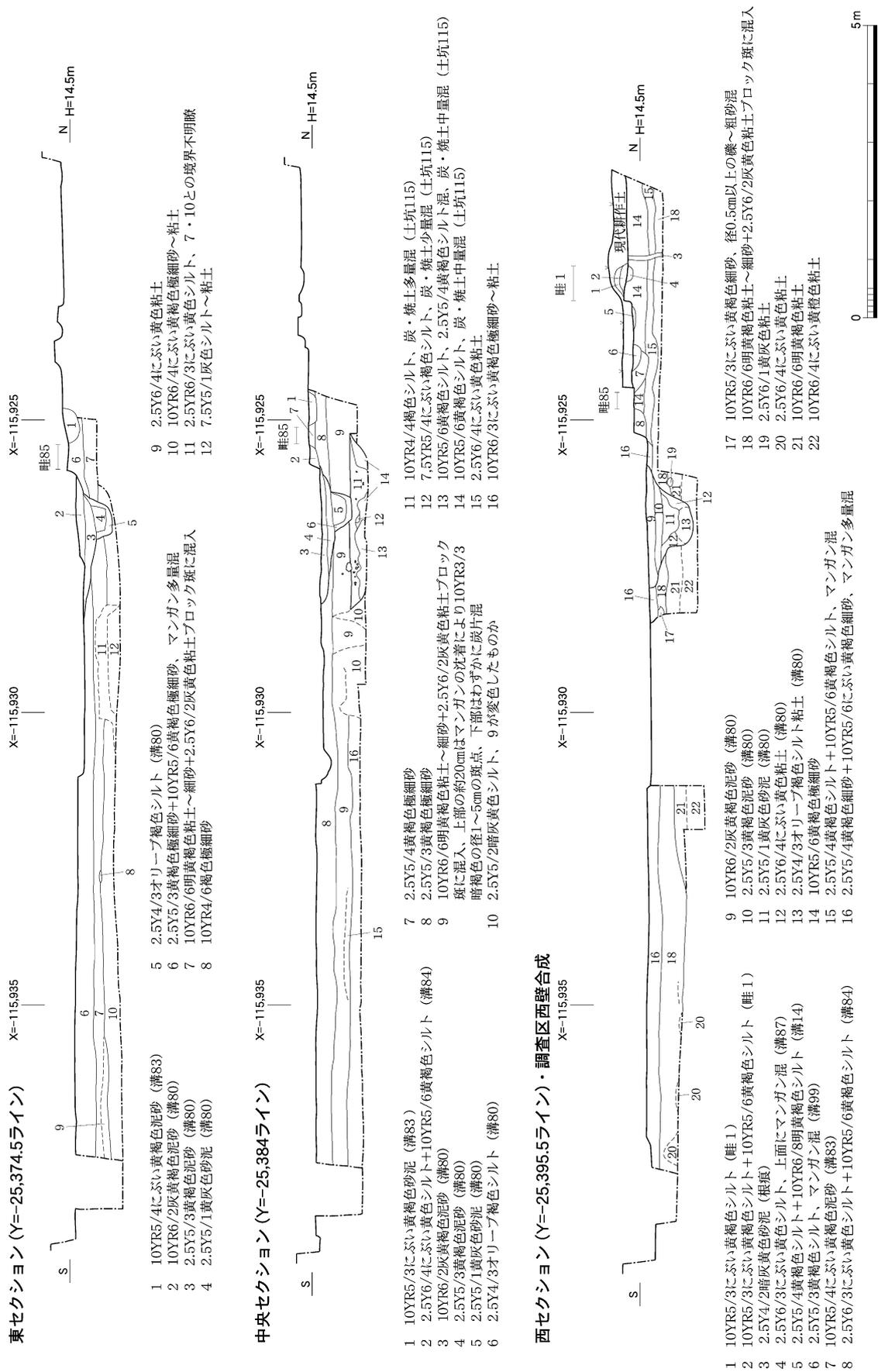


図9 セクション断面図 (1:100)

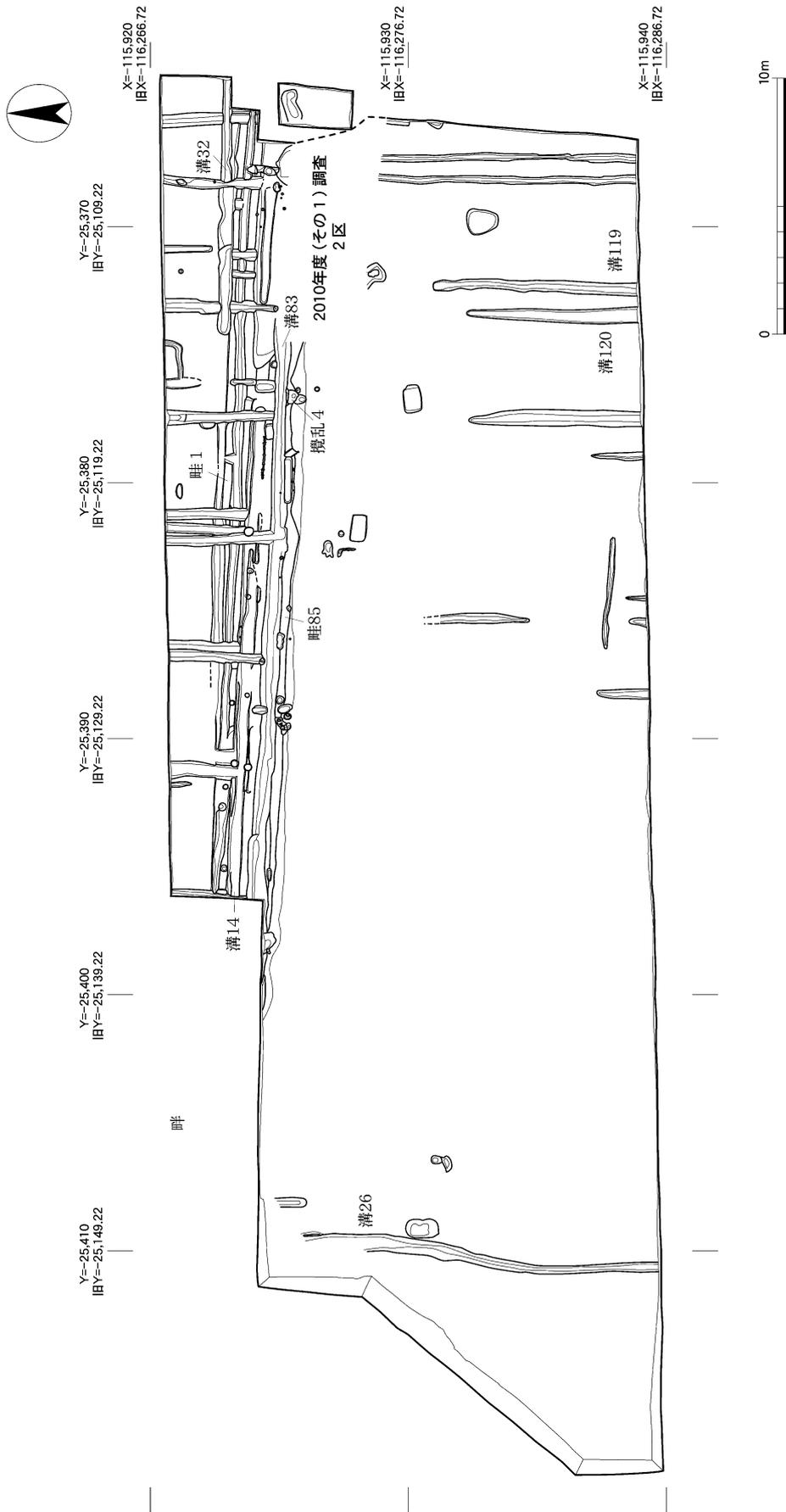


図10 第1面遺構平面図 [江戸時代] (1:250)

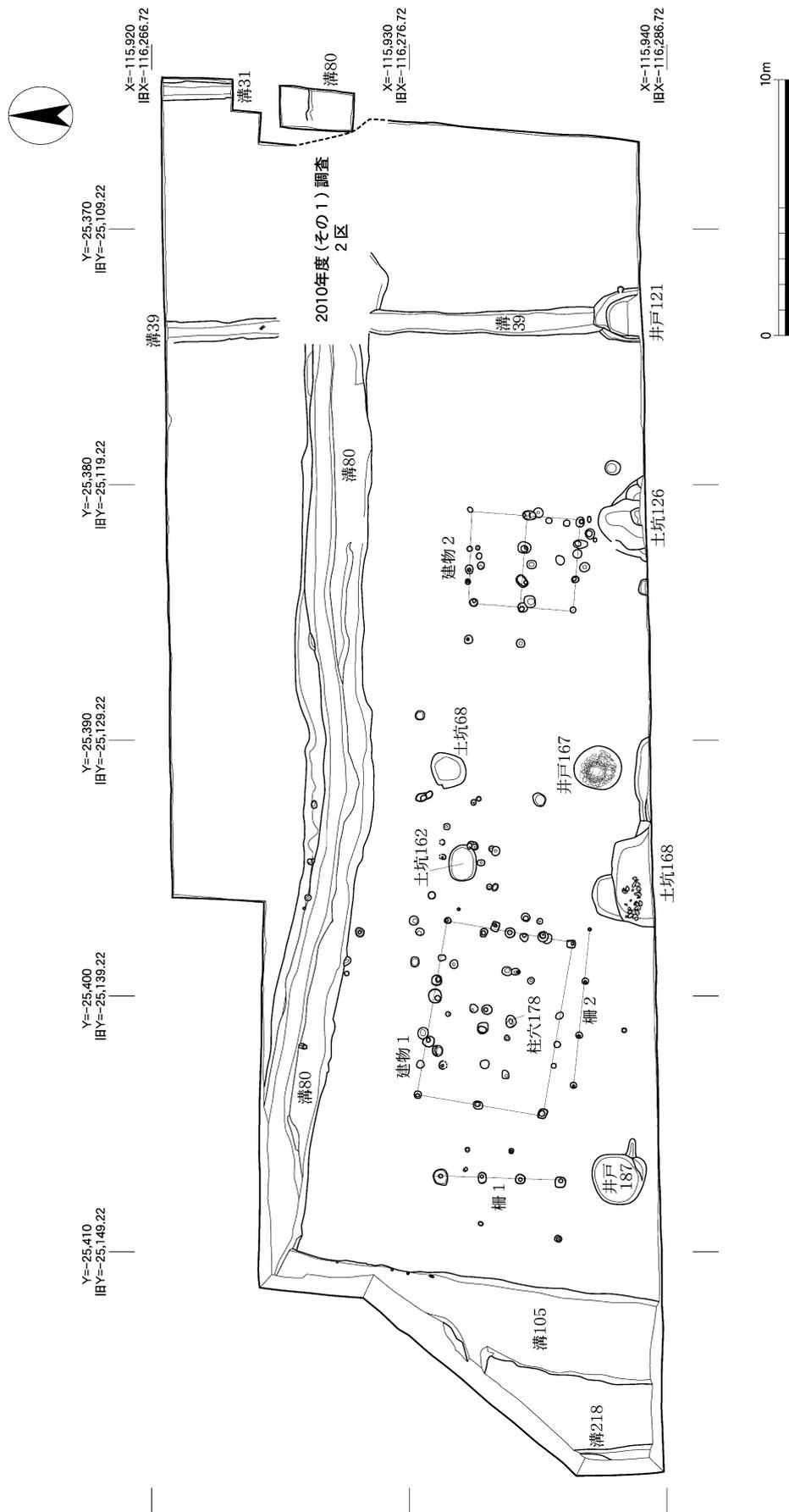


図 11 第 2 面遺構平面図 [室町時代] (1 : 250)

南側では東西方向1条のほかは南北方向の平行する溝群を検出した。多くは調査区内で途切れることから上部は耕作により削平されたと考えている。幅約0.1～0.6m、深さ約0.1～0.2mである。埋土はにぶい黄褐色シルトで、江戸時代の遺物とともに室町時代後期の遺物が混入して極少量出土した。また、東部の溝119・溝120からは長岡京期の遺物が混入して出土した。

(4) 第2面の遺構(図版3～6、図11～16)

建物・柵・溝・井戸・土坑・柱穴などを検出した。

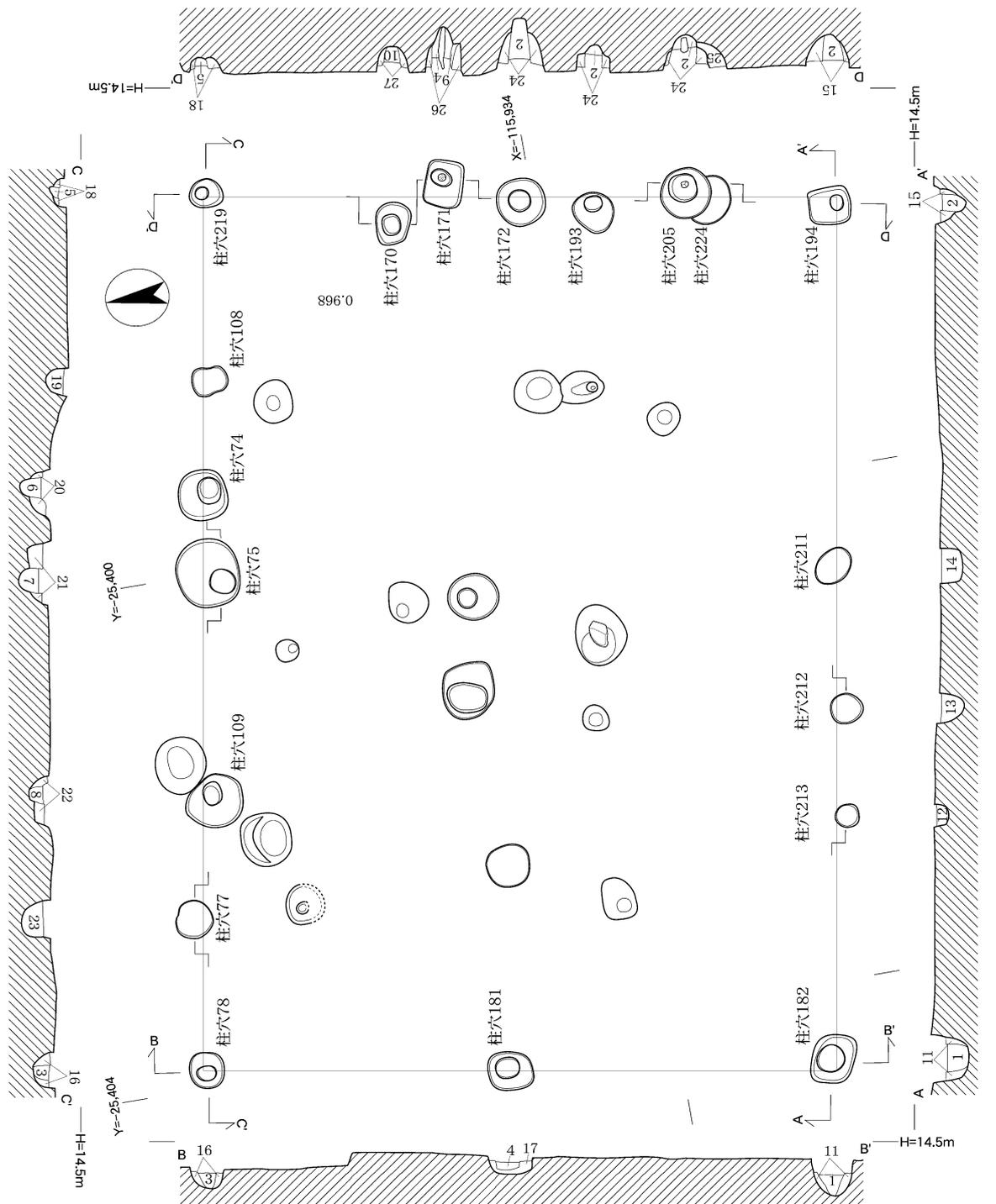
建物1(図版5、図12)西部で検出した。東西3間・南北2間の東西棟に復元できるが、柱穴が重複している部分が多く、何度かの建て替えが推定できる。復元長は東西約6.9m、南北約4.9mで、西側でやや北に振る方位をとる。柱穴は直径約0.2～0.5m、深さ約0.2～0.4mで、柱穴171・柱穴205など柱痕跡に柱根が残るものがある。また、内部の柱穴には束柱が含まれていることが考えられる。柱穴の間隔は北辺の柱穴78・柱穴109・柱穴74・柱穴219で約2.3mのほぼ等間隔、西辺の柱穴78・柱穴181・柱穴182で約2.4m・約2.5mのほぼ等間隔である。埋土は柱痕跡が灰黄褐色砂泥など、掘形は灰黄色砂泥などで、柱穴181などから室町時代後期の遺物がわずかに出土した。

建物2(図版5、図13)中央部東寄りで検出した。東西3間・南北2間の東西棟に復元でき、中央の柱筋にも2基の柱穴が認められることから総柱風の建物である。柱穴が重複している部分が多く、何度かの建て替えが推定できる。復元長は東西約3.7m、南北約4.2mで、北側でわずかに東に振る方位をとる。柱穴は直径約0.2～0.4m、深さ約0.1～0.4mで、柱穴140・柱穴147など柱痕跡に柱根が残るものがある。柱穴の間隔は西辺の柱穴155・柱穴156・柱穴151で約2.0mのほぼ等間隔、南辺の柱穴151・柱穴135・柱穴132・柱穴128では約1.0～1.4mと不揃いである。埋土は柱痕跡が黄灰色砂泥など、掘形が灰黄色砂泥などで、柱穴132などから室町時代後期の遺物がわずかに出土した。

柵1(図14)西部で検出した南北方向の柱穴列である。建物1から約2.6m西側に位置する。柱穴は4基で、長さは約4.7mである。ほぼ南北方向の方位をとる。柱穴は直径約0.4～0.5m、深さは約0.2～0.3mである。柱穴の間隔は約1.6mのほぼ等間隔である。埋土は柱痕跡が粘質の黄灰色泥土など、掘形が灰黄褐色シルトなどで、出土遺物はない。

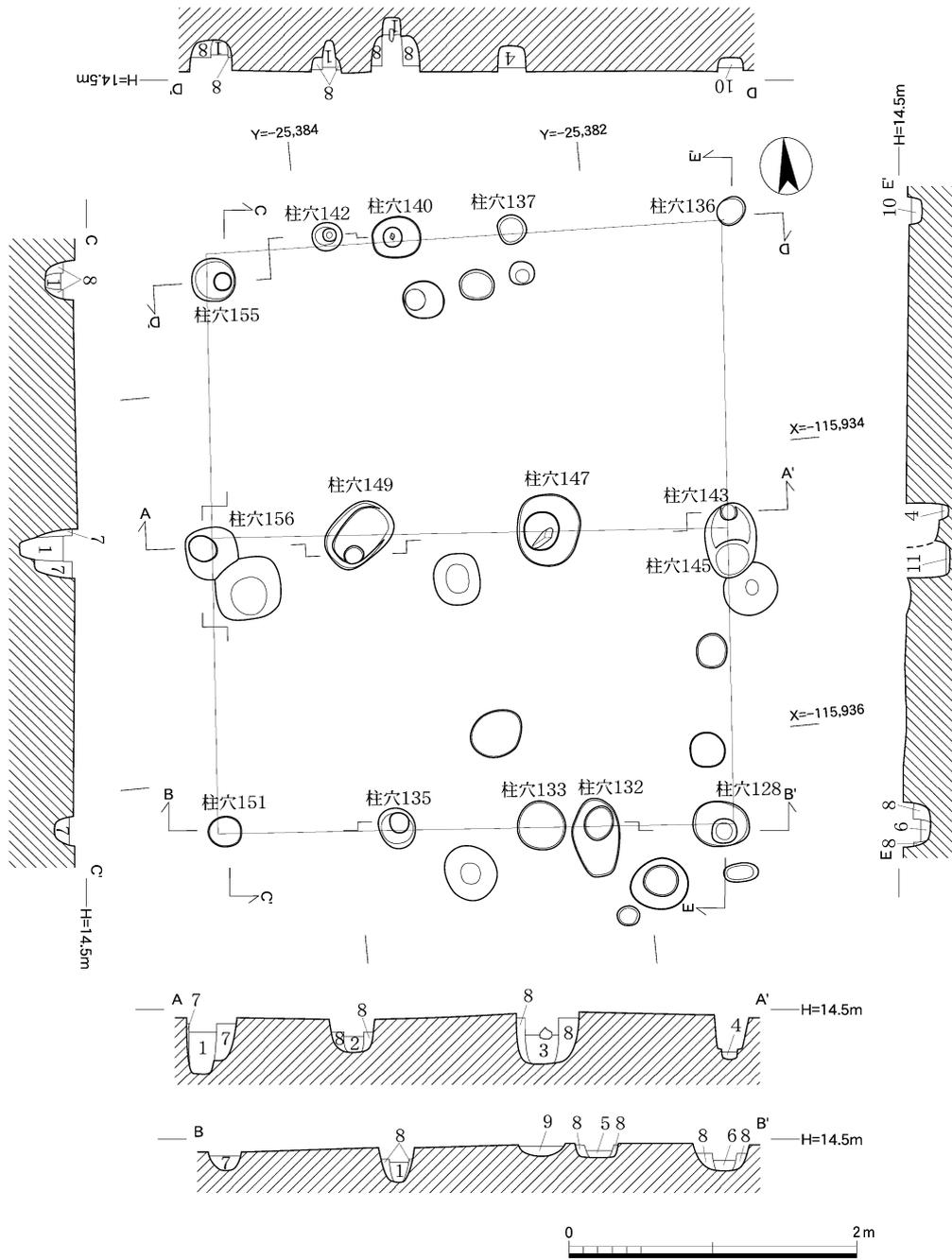
柵2(図15)南西部で検出した東西方向の柱穴列である。建物1から約1.0m南側に位置する。柱穴は4基で、検出長は約6.1mであるが、東端の1基は極めて小型のため、これを除くと柱穴は3基、長さは約4.1mとなる。西側でわずかに北に振る方位をとる。柱穴は西側の3基が直径約0.3m、深さ約0.3～0.4mで、柱痕跡に柱根が残る。柱穴の間隔は約2.0mのほぼ等間隔である。埋土は柱痕跡が暗灰黄色砂泥、掘形は黄褐色砂泥などで、出土遺物はない。

溝80(図版1・4、図9)北部で検出したわずかに蛇行する東西方向の溝である。東側は調査区外に延び、西側は溝105につながる。断面形は上部は浅い皿形、下部は逆台形で、長さ45.5m以上、幅約2.5m、深さ約0.6～0.8mである。底面は西に向けて傾斜する。埋土は大きく3層



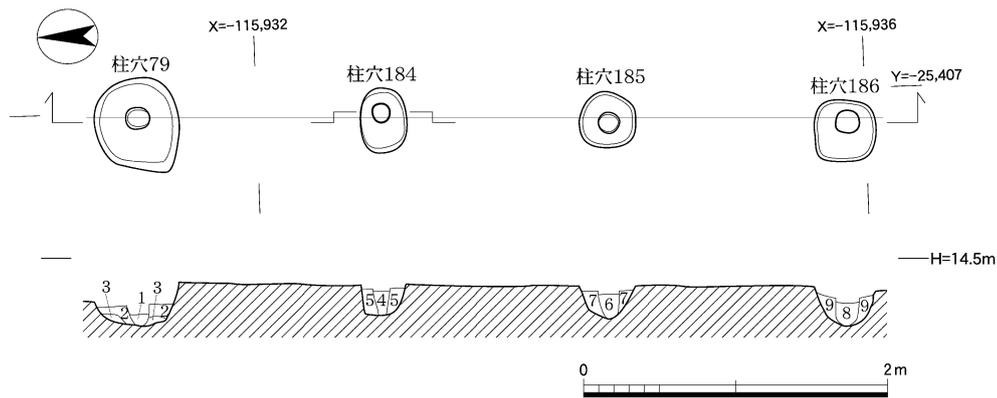
- | | | |
|----------------------------|-----------------------------|-----------------------------|
| 1 2.5Y5/2暗灰黄色シルト、マンガン混 | 12 2.5Y5/2暗灰黄色～6/2灰黄色砂泥 | 21 2.5Y6/1黄灰色～6/2灰黄色泥砂、 |
| 2 2.5Y5/2暗灰黄色シルト、炭混 | 13 2.5Y5/2暗灰黄色～6/2灰黄色砂泥、 | 10YR5/6黄褐色砂泥ブロック極少量混 |
| 3 2.5Y6/1黄灰色砂泥～泥土 | 10YR4/4褐色砂泥多量混 | 22 2.5Y5/2暗灰黄色～6/2灰黄色泥砂～砂泥 |
| 4 2.5Y5/2暗灰黄色シルト | 14 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥、10YR4/6褐色 | 23 2.5Y5/2暗灰黄色～6/2灰黄色砂泥～泥土、 |
| 5 2.5Y5/2暗灰黄色細砂+10YR4/6褐色 | 砂泥～泥土少量混 | 5YR5/8赤褐色焼土極少量混、炭混 |
| 6 2.5Y6/1黄灰色泥土、炭・焼土？極少 | 15 2.5Y5/2暗灰黄色シルト+10YR5/6 | 24 2.5Y5/2暗灰黄色シルト+10YR5/4 |
| 量混 | 黄褐色砂泥 | にぶい黄褐色シルト |
| 7 2.5Y6/2灰黄色砂泥～泥土、10YR5/6 | 16 2.5Y6/2灰黄色砂泥 | 25 10YR4/6褐色砂泥、2.5Y6/1黄灰色砂泥 |
| 黄褐色砂泥～泥土ブロック少量混 | 17 2.5Y5/2暗灰黄色シルト+10YR5/6 | 中量混 |
| 8 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥～泥土、炭混 | 黄褐色シルト、炭・マンガン混 | 26 2.5Y5/2暗灰黄色シルト+10YR5/4 |
| 9 10YR5/8褐色シルト | 18 10YR4/4褐色細砂+2.5Y5/3黄褐色細砂 | にぶい黄褐色シルト、マンガン多量混 |
| 10 2.5Y6/1黄灰色シルト | 19 2.5Y6/2灰黄色泥砂 | 27 2.5Y5/2暗灰黄色シルト+10YR5/6 |
| 11 2.5Y6/2灰黄色シルト+10YR5/4にぶ | 20 2.5Y6/1黄灰色～6/2灰黄色泥砂、10YR | 黄褐色シルト粘質ブロック少量 |
| い黄褐色シルト | 5/6黄褐色泥砂ブロック少量混、炭混 | |

図 12 建物 1 実測図 (1 : 50)



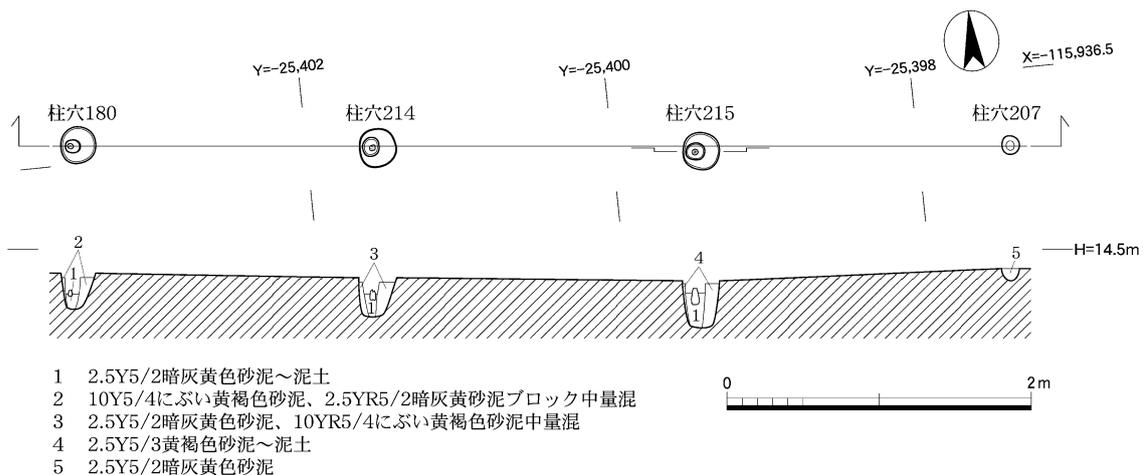
- | | | | |
|---|---|----|---|
| 1 | 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥 | 7 | 2.5Y5/2暗灰黄色~6/2灰黄色砂泥 |
| 2 | 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥、2.5Y6/2灰黄色砂泥中量混 | 8 | 2.5Y6/2灰黄色砂泥 |
| 3 | 2.5Y6/1黄灰色~6/2灰黄色砂泥、5YR3/6暗赤褐色
烧土が極少量混 | 9 | 2.5Y5/3黄褐色~6/2灰黄色砂泥、2.5Y6/1
黄灰色砂泥中量混 |
| 4 | 2.5Y5/2暗灰黄色~6/2灰黄色砂泥、炭混 | 10 | 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥、10Y5/6黄褐色中量混 |
| 5 | 2.5Y6/1黄灰色砂泥、炭混 | 11 | 2.5Y6/2灰黄色砂泥、炭混 |
| 6 | 2.5Y6/1黄灰色砂泥 | | |

図 13 建物 2 実測図 (1 : 50)



- | | |
|--|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1 2.5Y6/1黄灰色粘土 粘質、10Y5/6黄褐色粘土
少量混、マンガン含む 2 10Y5/6黄褐色砂泥～泥土+2.5Y6/1黄灰色～
6/2灰黄色粘土、マンガン含む 3 10Y6/4にぶい黄橙色粘質土、マンガン含む 4 10YR5/2灰黄褐色シルト+10YR4/6褐色粘質土、
マンガン多量に含む 5 2.5Y5/2暗灰黄色シルト+10YR5/4にぶい黄褐色
シルト 粘質、マンガン少量含む | <ol style="list-style-type: none"> 6 10Y5/4にぶい黄褐色シルト+10Y5/6黄褐色
シルト 粘質 7 2.5Y5/2暗灰黄色～6/2灰黄色シルト+10Y5/6
黄褐色シルト 粘質 8 2.5Y5/2暗灰黄色～6/2灰黄色粘土 9 2.5Y5/2暗灰黄色～6/2灰黄色砂泥、10YR5/4
にぶい黄褐色砂泥ブロック多量混、炭混 |
|--|---|

図 14 柵 1 実測図 (1 : 50)

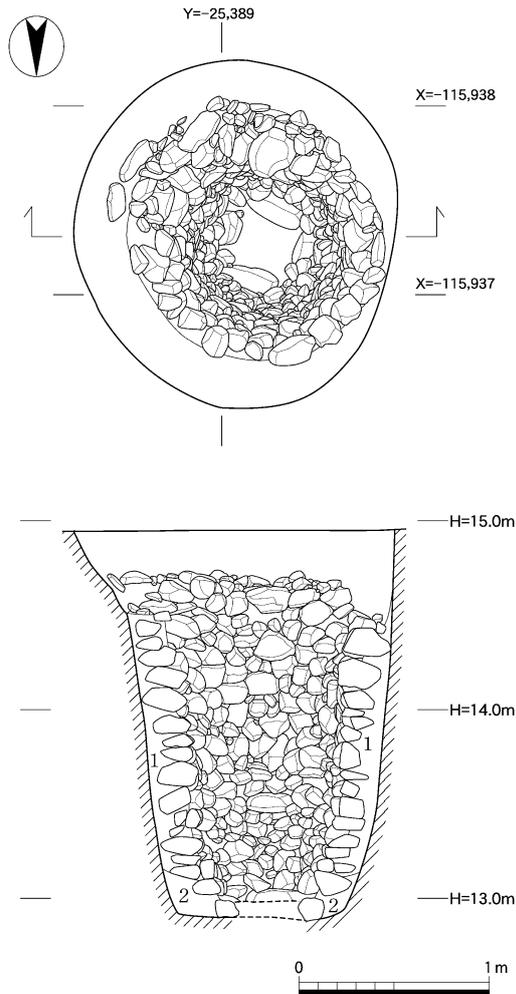


- 1 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥～泥土
- 2 10Y5/4にぶい黄褐色砂泥、2.5YR5/2暗灰黄色砂泥ブロック中量混
- 3 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥、10YR5/4にぶい黄褐色砂泥中量混
- 4 2.5Y5/3黄褐色砂泥～泥土
- 5 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥

図 15 柵 2 実測図 (1 : 50)

に分けることができる。上層は断面形が浅い皿形の部分にあたり、埋土は灰黄褐色泥砂・黄褐色泥砂で、室町時代後期から江戸時代初頭の遺物が出土した。中層は断面形が逆台形の部分にあたり、埋土は黄灰色シルトから砂泥で、室町時代後期の遺物が出土した。下層は中層に接する逆台形の形状の部分になる。にぶい黄色から灰オリーブ色粘土で、明黄褐色粘土や黄橙色粘土が変成したものと考えている。出土遺物はない。2010年度(その1)調査2区SN1下層の堆積層にあたる。

溝 105 (図版 4、図 8) 西部で検出した南北方向の溝である。北側・南側は調査区外に延び、調査区北部で溝 80 とつながる。断面形は幅の広い逆台形で、長さ 14.8 m 以上、幅約 3.5 m、深さ約 0.4 m である。底面は南に向けてわずかに傾斜する。埋土は大きく 3 層に分けることができる。上層は暗灰黄色泥砂・灰色泥砂で、木片・ビニール片などを含んでいることから近代に埋め立てられたものである。中層は暗灰黄色砂泥・灰オリーブ色シルトのブロックを含む灰色砂泥で、室



- 1 2.5Y6/3にぶい黄色粘土
- 2 2.5Y4/3オリーブ褐色泥砂、細砂以下

図 16 井戸 167 実測図 (1 : 40)

町時代後期から江戸時代初頭の遺物が出土した。溝 80 の上層・中層に対応する。下層は灰オリーブ色粘土で、明黄褐色粘土や黄橙色粘土が変成したものと考えている。出土遺物はない。溝 80 の下層に対応する。

溝 218 西壁際で検出した南北方向の溝である。北側・南側は調査区外に延びる。西肩が調査区外となるため断面形は不明で、長さ 3.0 m 以上、幅 0.5 m 以上、深さ 0.6 m 以上である。埋土は暗灰黄色砂泥で、木片などが出土したのみである。

井戸 167 (図版 5、図 16) 南部中央で検出した石組の井戸である。掘形の平面形は南北約 1.8 m、東西約 1.7 m のほぼ円形である。深さは検出面から約 2.0 m で、底部の標高は約 12.9 m である。最下段に長さ約 40 cm・幅約 20 cm の細長い石を方形に据え、大きき約 15 ~ 30 cm の石材を主に長辺を内側に向けて上部が拡がるようにして組み上げる。南西側上部の石組は一部欠落する。石材はチャートが主である。湧水のため底部の形状の詳細は不明であるが、水溜に据えたと考えられる曲物が出土した。埋土は灰黄色

色砂泥・黄褐色砂泥で、室町時代後期の遺物が出土した。

井戸 187 南西部で検出した素掘りの井戸である。掘形の平面形は直径約 2.0 m の円形である。湧水のため底部は完掘していないが、深さは検出面から 1.9 m 以上である。井戸枠の痕跡を認めることができなかったが、掘形の規模などからすると木枠などの井戸枠があったと考えられる。埋土は暗灰黄色砂泥などで、室町時代後期の遺物が出土した。

土坑 126 (図 8) 南部中央壁際で検出した。南側は調査区外となる。平面形は不整形で、南北 2.0 m 以上、東西 3.5 m 以上、深さ 0.5 m 以上である。埋土は灰オリーブ色泥砂などで、室町時代後期の遺物が出土した。

土坑 168 (図 8) 南部中央壁際で検出した。南側は調査区外となる。平面形は不整形で、南北 1.5 m 以上、東西 7.5 m 以上、深さ 0.3 m 以上である。埋土は黄褐色砂泥などで、大きき約 15 ~ 30 cm の石材を含むが、これは井戸 167 南西側上部の石材を廃棄した可能性がある。室町時代後期の遺物が出土した。

土坑 68 中央部で検出した。平面形は南北約 1.3 m、東西約 1.2 m のほぼ円形で、深さ約 0.3

mである。埋土は黄灰色砂泥で、室町時代後期の遺物が出土した。

土坑 162 中央部で検出した。平面形は南北約 1.0 m、東西約 1.5 mの楕円形で、深さ約 0.2 mである。埋土は暗灰黄色砂泥で、室町時代後期の遺物が出土した。

溝 31 (図版 6、図 7) 北東部壁際で検出した南北方向の溝である。北側・南側は調査区外に延びる。北側でやや西に振る方位をとる。断面形は浅いU字形で、長さ 2.6 m以上、幅約 0.8 m、深さ約 0.2 mである。埋土は黄褐色シルトで、長岡京期の遺物がわずかに出土した。この溝の南延長を確認するため 2010 年度 (その 1) 調査 2 区東側に拡張区を設定したが、溝 80 や近代の攪乱のため痕跡は残っていなかった。

溝 39 (図版 6、図 7) 北東部で検出した南北方向の溝である。北側は調査区外に延び、南側は井戸 121 に攪乱される。北側でやや西に振る方位をとる。断面形は浅いU字形で、長さ 18.5 m以上、幅約 0.8 m、深さ約 0.2 ~ 0.3 mである。埋土は黄褐色シルトで、長岡京期の遺物が出土した。2010 年度 (その 1) 調査 2 区 SK 6・SK 7にあたる。溝 31 との間隔は約 9.4 mである。溝 31・溝 39 は江戸時代の耕作溝と平行するが、埋土が異なり室町時代以降の遺物が出土しないことから、長岡京期の遺構と判断した。

井戸 121 (図版 6、図 8) 南西部壁際で検出した素掘りの井戸である。南側は調査区外となるが、掘形の平面形は直径約 2.1 mの円形に復元できる。深さは検出面から 1.9 mで、底部の標高は約 13.0 mである。湧水のため底部の形状の詳細は不明であるが、水溜に据えたと考えられる曲物の破片が出土した。また、井戸側の痕跡を認めることができなかったが、掘形の規模などからすると木枠などの井戸枠があったと考えられる。埋土はオリーブ灰色細砂などで、長岡京期の遺物が出土した。

(5) 第 3 面の遺構 (図版 7、図 17)

土坑を 2 基検出した。また、明黄褐色粘土から縄文土器片が出土した。

土坑 115 (図版 7、図 18) 中央部で検出した。溝 80 の完掘および下層遺構確認のための中央セクション断割りにより炭化物の拡がり認め、周辺を精査したものである。炭化物は南北約 4.2 m、南北約 2.9 m、深さ約 0.3 mの範囲を中心に拡がるが、遺構の輪郭は不明瞭である。埋土は黄褐色シルトなどで、特に上部中央に焼土塊・炭化物が集中して堆積する。焼土塊は大きさ数mmから約 10 cmの大型のものまである。また、炭化物は大きさ 10 cm程度のものもあるが、ほとんどが数mmの小片である。土器・石器などの遺物は伴わない。炭化物の放射性炭素年代測定の結果、B.P. 4500 ± 30 年 (縄文時代中期中葉) の年代を得た。

土坑 225 (図版 7、図 19) 南部中央で検出した。平面形は直径約 0.6 mの円形であるが、断面観察の結果、黄褐色極細砂下面の遺構であることが明らかとなったため、深さは約 0.4 mになる。埋土はにぶい黄橙色シルトで、中央部に焼土塊・炭化物が堆積する。土器・石器などの遺物は伴わない。炭化物の放射性炭素年代測定の結果、B.P.4050 ± 30 年 (縄文時代中期末から後期初頭) の年代を得た。

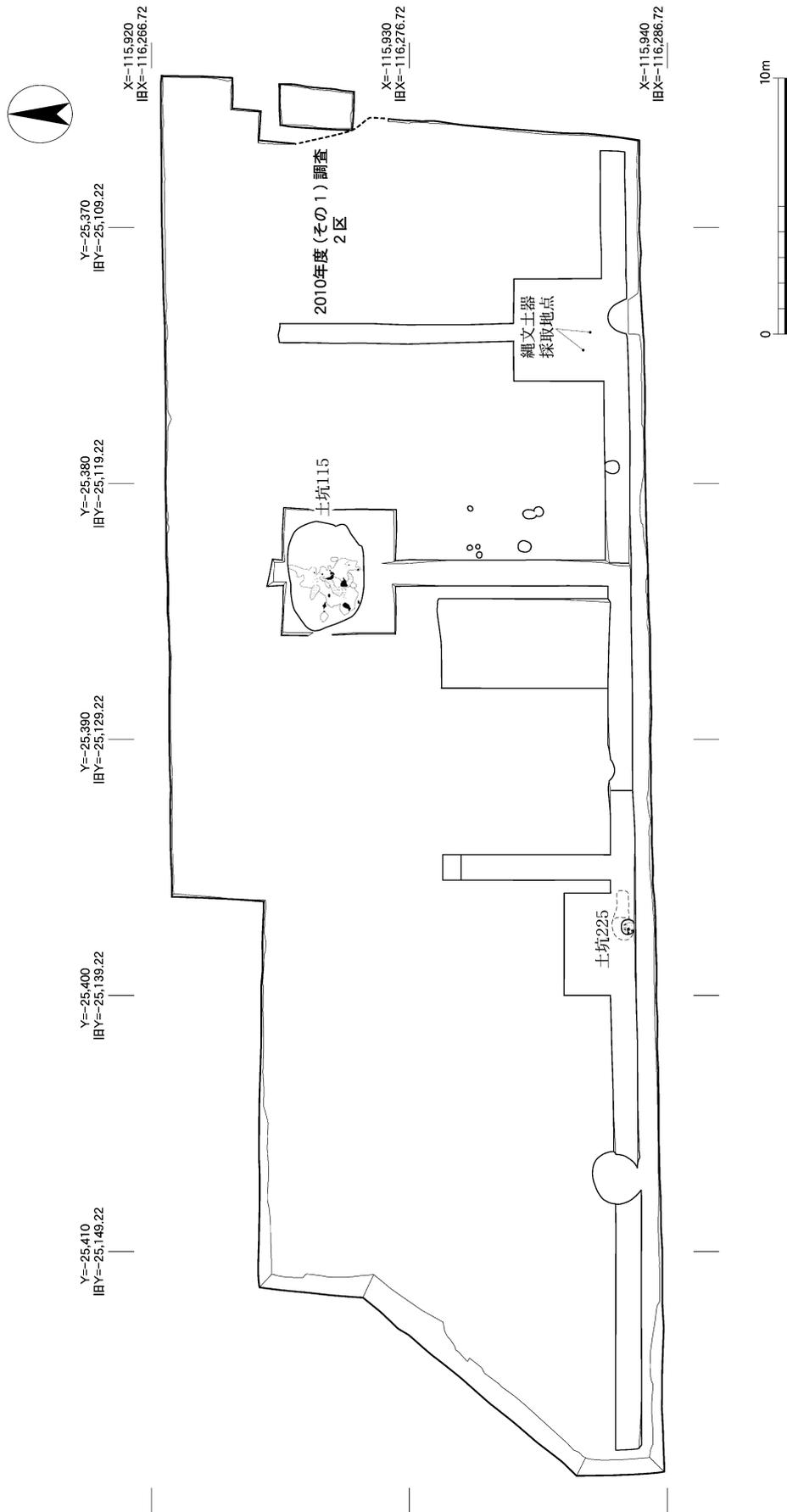


図 17 第 3 面遺構平面図 [縄文時代] (1 : 250)

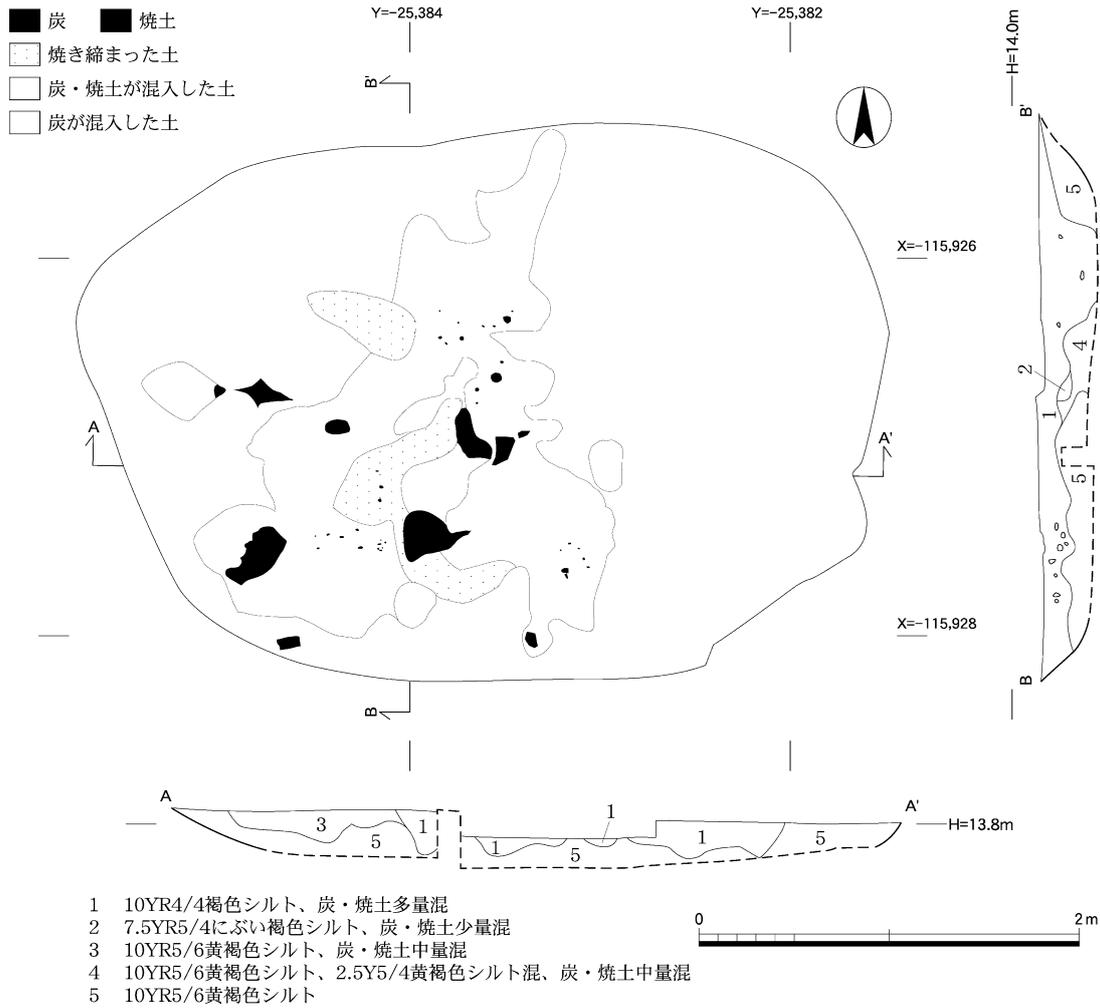


図 18 土坑 115 実測図 (1 : 40)

縄文土器片 (図 20) 縄文土器片は南東部の掘り下げ中に明黄褐色粘土から出土した。周辺を精査したが、土坑などの遺構の痕跡を認めることはできなかった。検出地点の標高は 13.7 m である。

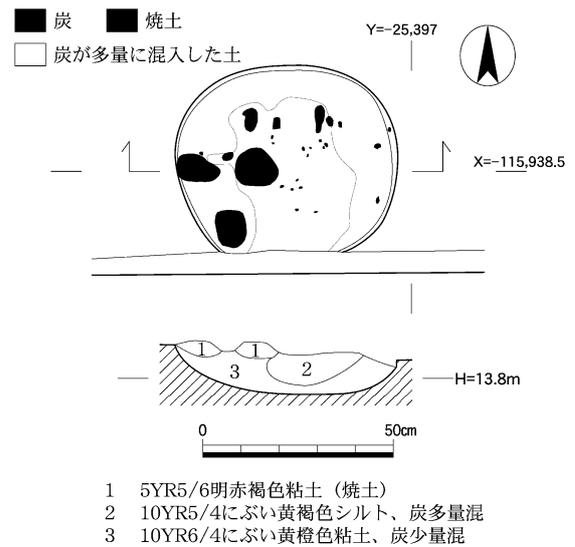


図 19 土坑 225 実測図 (1 : 20)

4. 遺物

(1) 遺物の概要

縄文時代から江戸時代にいたる遺物が整理箱にして18箱出土した。内容は土器類、瓦類、金属製品、石製品、木製品などがある。その大半は土器類で、次いで木製品が多い。全体的には長岡京期と室町時代後期の土器類や木製品の割合が大きく、縄文時代と平安時代、江戸時代の遺物は少ない。

縄文時代の遺物には、土器片が2点ある。

長岡京期から平安時代の遺物には、土器類（土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・輸入磁器）、瓦類、石製品（砥石）、木製品（曲物の底板）などがある。長岡京期の遺物は、長岡京期の溝や井戸のほか、新しい時代の遺構や包含層に混入して出土した。

室町時代後期の遺物には、土器類（土師器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器）、金属製品、石製品（砥石・石臼）、木製品（椀・下駄・曲物・木球・柱根）などがある。

江戸時代の遺物には、土器類（土師器・焼締陶器・施釉陶器・磁器）、金属製品（釘・銭貨）、石製品（火打ち石）などがある。

(2) 土器類

土器類は出土遺物の多くを占めるが、小片が多く図示できるものは少量である。ここでは縄文時代から室町時代後期の土器を報告する。時代別の出土量では、縄文時代・平安時代の土器類は

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
縄文時代	縄文土器		縄文土器2点		
長岡京期 ～平安時代	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入磁器、瓦、石製品、木製品		土師器5点、須恵器11点、緑釉陶器1点、灰釉陶器1点、輸入白磁1点、石製品1点、木製品1点		
室町時代後期	土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、金属製品、石製品、木製品		土師器21点、瓦器3点、焼締陶器5点、施釉陶器3点、輸入陶磁器3点、銅製品1点、石製品2点、木製品7点		
江戸時代	土師器、焼締陶器、施釉陶器、磁器、瓦、金属製品、石製品、木製品		鉄製品1点、銭貨4点、石製品1点		
合計		22箱	74点（4箱）	8箱	10箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より4箱多くなっている。

極少量で、長岡京期が約3割、室町時代後期が約6割、江戸時代が1割を占める。

1) 縄文時代 (図20、図版8)

明黄褐色粘土から出土した。1・2とも器形は不明で、外面に付加条痕がある。胎土は密で、2.0mm以下の石英・長石を含み、同一個体の可能性がある。縄文時代中期後半に属する。

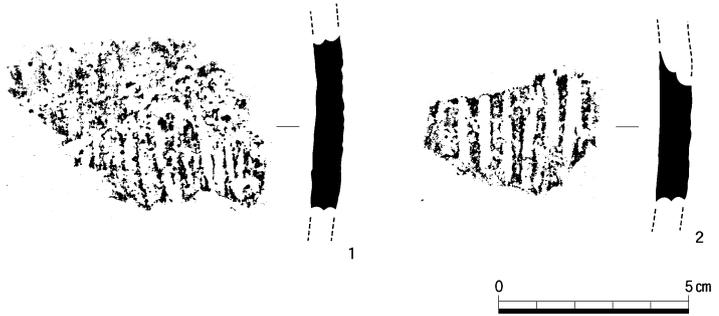


図20 土器実測図1 [縄文時代] (1:2)

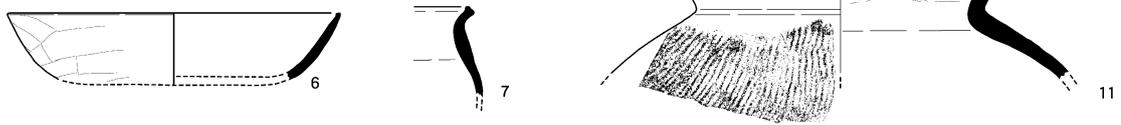
2) 長岡京期から平安時代 (図21、図版8)

長岡京期の溝39・井戸121から出土したものが中心で、その他に室町時代後期・江戸時代の遺構や包含層に混入して出土した。土師器・須恵器がある。なかでも須恵器の甕が多い。平安時代の遺物は少量で緑釉陶器・灰釉陶器・中国製白磁がある。

溝39



井戸121



その他遺構

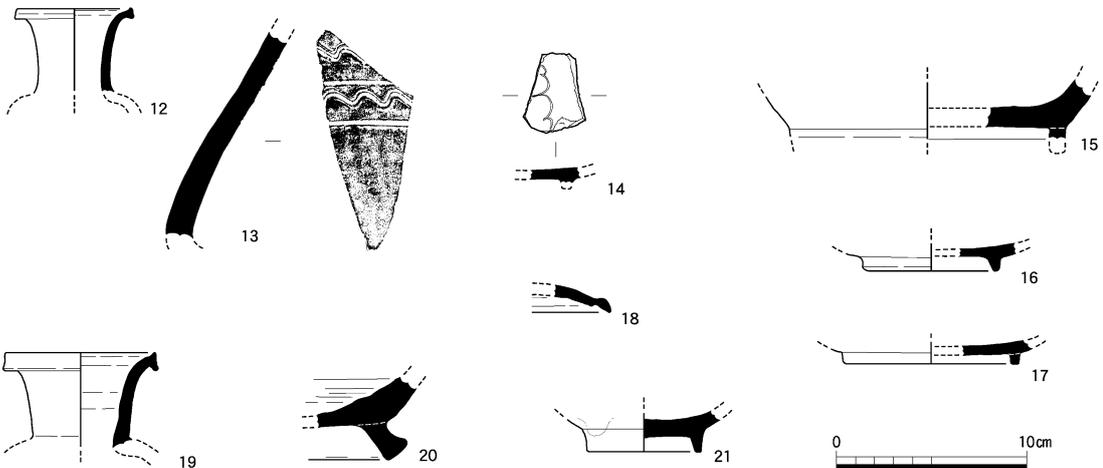


図21 土器実測図2 [長岡京期から平安時代] (1:4)

溝 39 (3～5) 3・4は土師器皿で、口縁部は内に丸くおさめ、端部は肥厚する。内外面とも磨滅しており調整痕は不明である。5は壺で、体部が底部から直線的に開き気味で、高台は貼り付けである。

井戸 121 (6～11) 6は土師器杯で、口縁部は内に丸くおさめる。外面はケズリ、内面はナデを施す。内面には墨が付着する。7はやや小振りの土師器甕である。肩部で粘土を継ぎ足し口縁部を形成する。口縁部は屈曲して外に開き、端部はつまみ上げる。8～11は須恵器甕である。8～10は口縁部のみの残存である。8はやや内弯気味に開き、端部外面は強いナデで、内傾する面をつくる。内外面はナデ調整ののち、外面に2条の波状文と沈線を施す。同一個体と考えられる須恵器甕の口縁部が溝 80 から出土した。9は端部は肥厚し、端部外面直下に断面三角形の突帯を巡らす。内外面はナデ調整である。10は口縁部は肩部から屈曲して外反気味に開く。内外面はナデ調整ののち、外面に粗雑な波状文と沈線を施す。11は肩部で粘土を継ぎ足し口縁部を形成する。肩部外面はタタキ、内面はナデ調整で、口縁上部を打ち欠いて、口縁を短くする。内面には全面に墨が付着する。

その他遺構 (12～21) 12は須恵器瓶子で、ロクロ成形である。直立する頸部から口縁部が外反し端部はつまみ上げる。溝 119 から出土した。13は須恵器甕の口縁部で、外面に2条の波状文と沈線を施す。14は緑釉陶器碗もしくは皿の底部である。削出高台で底部内面に陰刻の花文を描く。13・14は溝 120 から出土した。15は須恵器壺の底部で、貼付高台である。溝 80 から出土した。16は灰釉陶器碗もしくは皿の底部で貼付高台である。土坑 168 から出土した。17は須恵器杯の底部である。貼付高台である。全体が磨滅する。拡張区攪乱から出土した。18は須恵器杯蓋で、ロクロ成形である。天井部から口縁端部が屈曲して端部は下外方に垂下する。耕作溝 32 から出土した。19は須恵器壺で、ロクロ成形である。直立する頸部から口縁部が外反し、端部はつまみ上げる。20は須恵器壺の底部で、高台は貼付高台で外に大きく開く。21は中国製白磁碗の底部で、削出高台である。高台と高台内は露胎する。19～21は江戸時代の耕作土から出土した。

3) 室町時代 (図 22、図版 9)

出土遺物は土師器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・輸入陶磁器などがある。図示できた遺物のなかでも土師器や瓦器の羽釜が多い。時期は室町時代後期に属する。

溝 80 (22～32) 22は土師器の小型皿である。口縁部が外反気味に開き、底部内外面はオサエ、口縁部内外面はナデである。23～26は土師質土器の羽釜で、いずれも上部のみの残存である。下方に延びる体部上部に鏝がつくタイプである。口縁部は屈曲して外反し、端部はつまみ上げる。屈曲部外面には強いナデを施す。27・28は瓦器の羽釜である。27は口縁上部に鏝がつく。28は口縁部のみであるが、口縁端部は垂直に立ち上がり、体部外面上部に2条の沈線を施す。体部上部に鏝がつくタイプである。29・30は焼締陶器挿鉢である。29は信楽産で、内外面とも横ナデで、口縁部はやや外反する。挿目は5本1単位である。30は備前産の底部で、外面はオサエ、内面は磨滅しており調整は不明である。挿目は10本1単位である。2次焼成を受けている。31は施釉

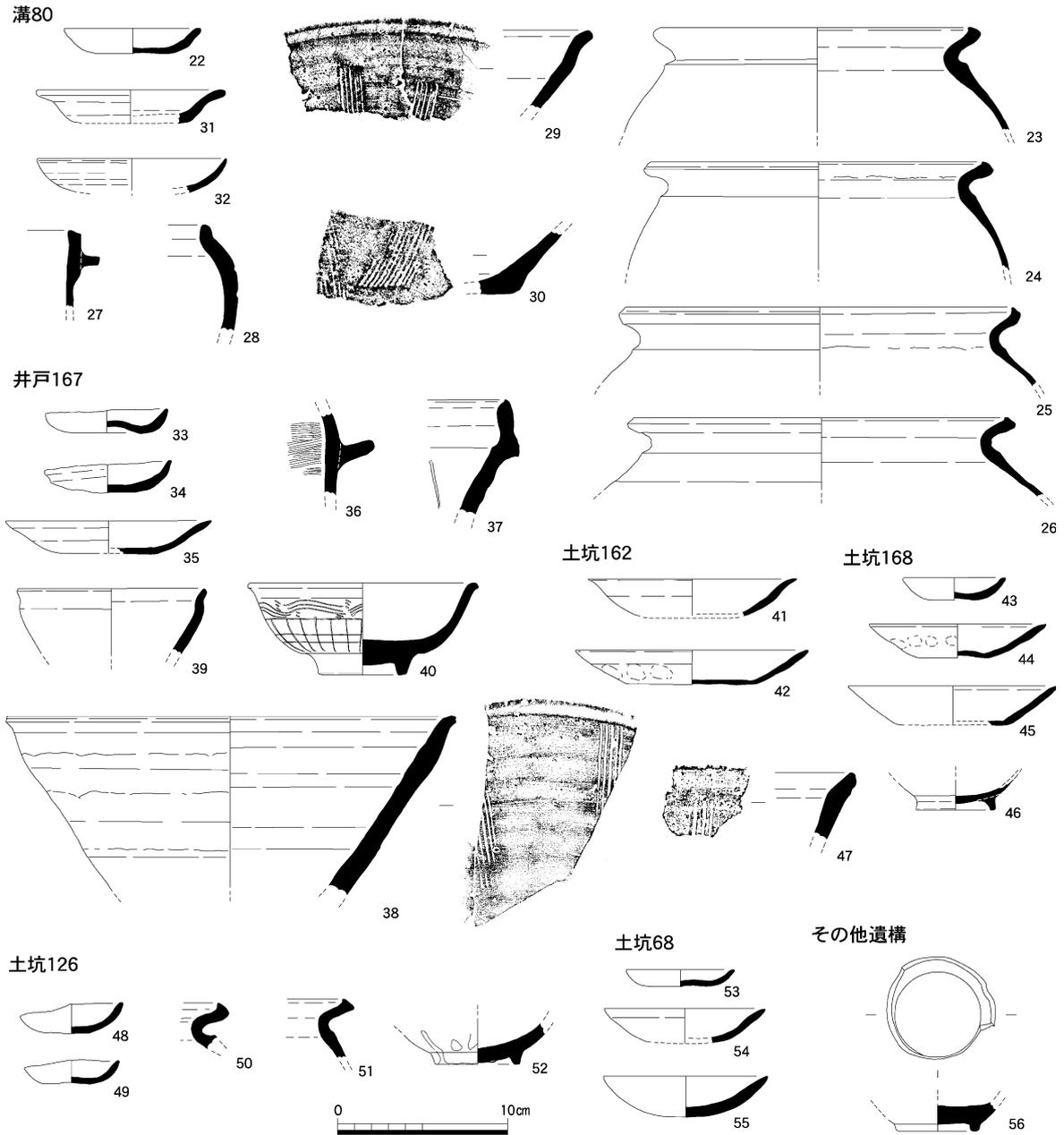


図 22 土器実測図 3 [室町時代後期] (1 : 4)

陶器の美濃産の皿で、口縁部は外反し、内外面に灰釉を施す。32は中国製白磁皿の小片である。

井戸 167 (33 ~ 40) 33 ~ 35 は土師器皿である。33・34 は小型皿で、底部内外面はオサエ、口縁部はナデである。33 は底部中央を押し上げる。35 は大型皿で、平底から体部が直線的に開く。36 は瓦器の羽釜で、口縁端部は欠損する。体部外面はオサエ。体部内面・口縁部内外面はナデである。37・38 は焼締陶器播鉢である。37 は備前産で、口縁部は屈曲して立ち上がる。口縁部内外面は横ナデである。屈曲部分の外面に重ね焼きの痕が付く。播目は 1 本だけ残存する。38 は信楽産で、体部・口縁部内外面は横ナデである。体部外面に粘土の継ぎ足し痕が残る。播目は 5 本 1 単位である。39 は施釉陶器の美濃産の天目椀で、鉄釉を施す。40 は中国製白磁椀である。削出高台で、口縁端部は外反する。体部外面は櫛描文と格子を描き、高台内部を除き釉を施す。

土坑 162 (41・42) とともに土師器大型皿である。41 は平底から体部がやや外反気味に開き、42 は平底から体部が直線的に開く。底部外面はオサエ、底部内面・口縁部内外面はナデである。

土坑 168 (43～47) 43～45 は土師器皿である。43 は手捏ねの小型皿で、底部外面を指で押さえ凹みをつける。44 は中型皿で、内面を底部近くまでナデたのち、底部周辺に強くナデた痕跡を残す。口縁端部に煤が付着する。45 は大型皿で、平底から体部が直線的に開く。底部外面はオサエ、底部内面・口縁部内外面はナデである。46 は土師器椀の底部である。貼付高台で、京都の市街地の遺構ではみられない器形であることから乙訓産の土器と考えられる。47 は焼締陶器播鉢である。信楽産で、播目は 3 本 1 単位である。

土坑 126 (48～52) 48・49 は手捏ねの土師器小型皿である。50・51 は土師質土器の羽釜で、51 は上部、50 は口縁部のみの残存である。ともに下方に延びる体部上部に鏝がつくタイプである。口縁部は屈曲して外反し、端部はつまみ上げる。屈曲部の外面には強いナデを施す。52 は施釉陶器の美濃産の椀で、内外面に灰釉を施す。底部外面にトチン痕がつく。

土坑 68 (53～55) いずれも土師器皿である。53 は手捏ねの小型皿で、底部外面を指で押さえ凹みをつける。55 は器壁が厚い。54・55 に中型皿で、内面を底部近くまでナデたのち、底部周辺に強くナデた痕跡を残す。京都の市街地の遺構ではみられないタイプであることから、乙訓産の土器と考えられる。

その他遺構 (56) 56 は中国製青磁椀の底部で、削出高台である。外面には蓮弁模様を施し、高台内は露胎する。江戸時代の耕作土から出土した。

(3) 瓦類

瓦類は整理箱に 1 箱出土した。ほとんどが溝 80 や攪乱などから出土したものである。江戸時代の平瓦・棧瓦などの他に布目のつく平瓦・丸瓦がある。破片は小片が多く図示できるものはない。

(4) 金属製品 (図 23、図版 10)

金属製品には銅製品、鉄製品、銭貨がある。出土した遺物も、図示できた遺物も極少量である。

金 1 は鉄製品で、両方の先端が尖る台釘である。断面方形で、木材を繋ぐ隠し釘として使われたと考えられる。溝 14 から出土した。

金 2 は薄く棒状に延ばした銅製品で、先が細くなる。上部は欠損しており、用途は不明である。土坑 168 から出土した。

金 3～金 6 は銭貨である。すべて「寛永通寶」で、初鑄は 1626 年である。金 6 は腐蝕がはげしく、かろうじて寛永通寶とわかる。金 3 は溝 105 から、金 4・金 5 は江戸時代の耕作土から、金 6 は攪乱 4 から出土した。

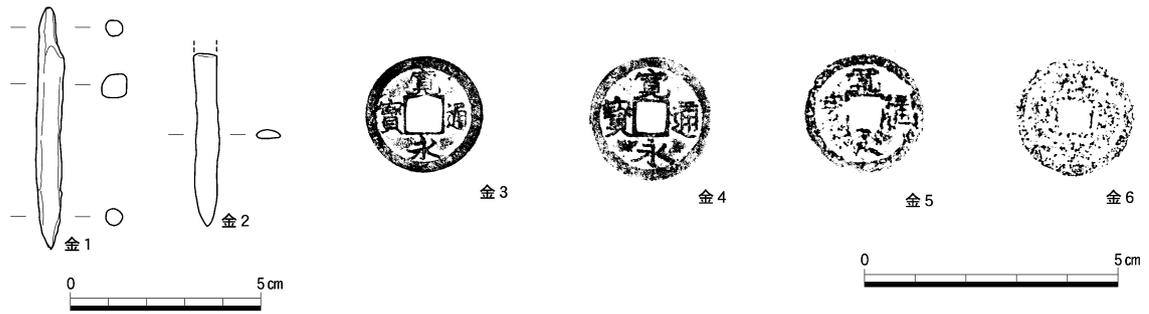


図 23 金属製品実測図（1：2）、銭貨拓影（2：3）

(5) 石製品（図 24、図版 10）

石製品には火打ち石・砥石・石臼がある。

石 1 は火打ち石で、石材はチャートである。溝 105 から出土した。

石 2・石 3 は砥石である。石 2 は両端が欠損し、裏面は剥離している。上面・両側面の 3 面が滑らかで磨滅しており、線条痕がつく。石材はやや赤味がかった灰白色の泥岩である。土坑 126 から出土した。石 3 は自然石を利用した砥石で、上面が滑らかで磨滅しており、下部は切断したように割れ、裏面は剥離している。石材は暗青灰色の粘板岩である。井戸 121 から出土した。

石 4 は石臼で、片面に播り溝がつく。石材は花崗岩である。柱穴 178 の底から出土した。柱の根石に転用されたものである。

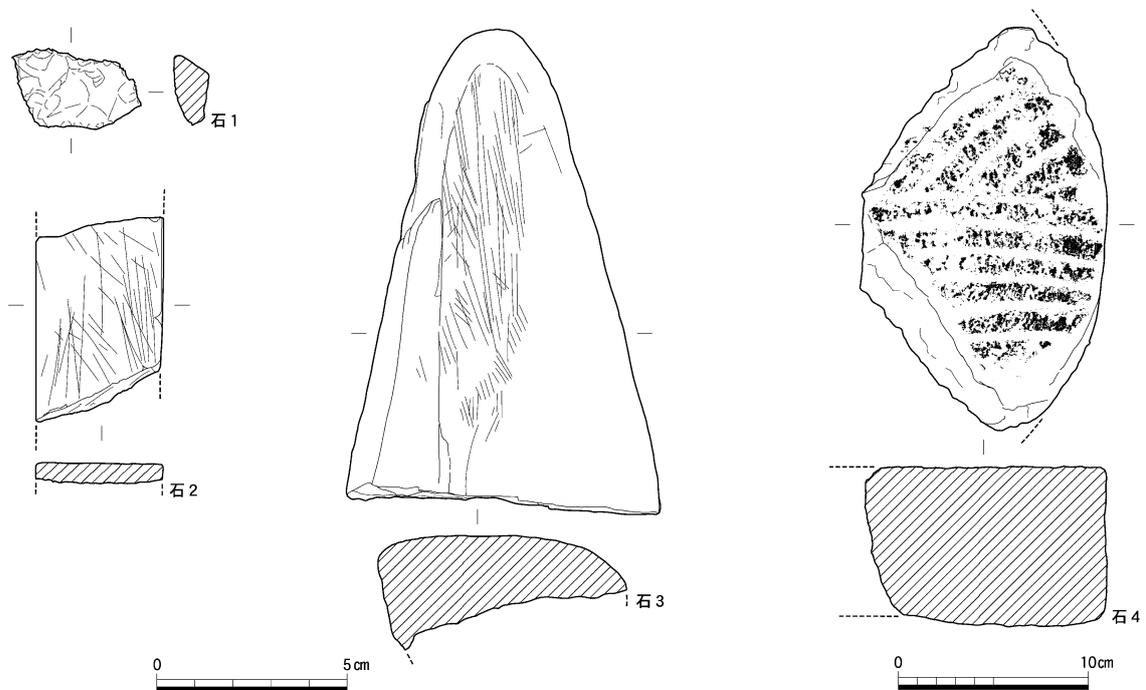


図 24 石製品実測図（1：2、石 4 のみ 1：4）

(6) 木製品 (図 25、図版 10)

木製品には、下駄、曲物底板、木球、桶側板などの生活用品や建具の一部、板状製品・柱根などがある。大半が溝 80 から出土したもので、その他、井戸 121・167、柱穴などからも出土している。ここでは溝 80 から出土した遺物を中心にその一部を掲載する。

井戸 121 (木 1) 曲物の底板で、大部分は欠損する。井戸底の水溜に据えられた曲物の一部と考えられる。

溝 80 (木 2～木 6) 木 2 は自然木の枝を斜めに切り落としたもので、断面は滑らかである。下部は欠損する。用途は不明である。木 3 は椀で、底部は欠損する。体部内面の下方に 2 箇所の焦げ痕がある。木 4 は木球である。ロクロ成形で、上部・下部にケズリ痕がつく。木 5 は連歯下駄で、後側が欠損する。平面形は楕円形である。木 6 は木を加工して作った部材の一部である。木の片面に削り出して作った斜めの棒状のものがつく。

井戸 167 (木 7) 円形曲物である。土圧により変形し側板は楕円に歪む。幅 4.0 cm・厚さ 0.1 cm の薄板を曲げて樹皮で綴じ、側板に 2 箇所木釘を打ち付け底板を取り付ける。井戸底の水溜に据えられた曲物である。

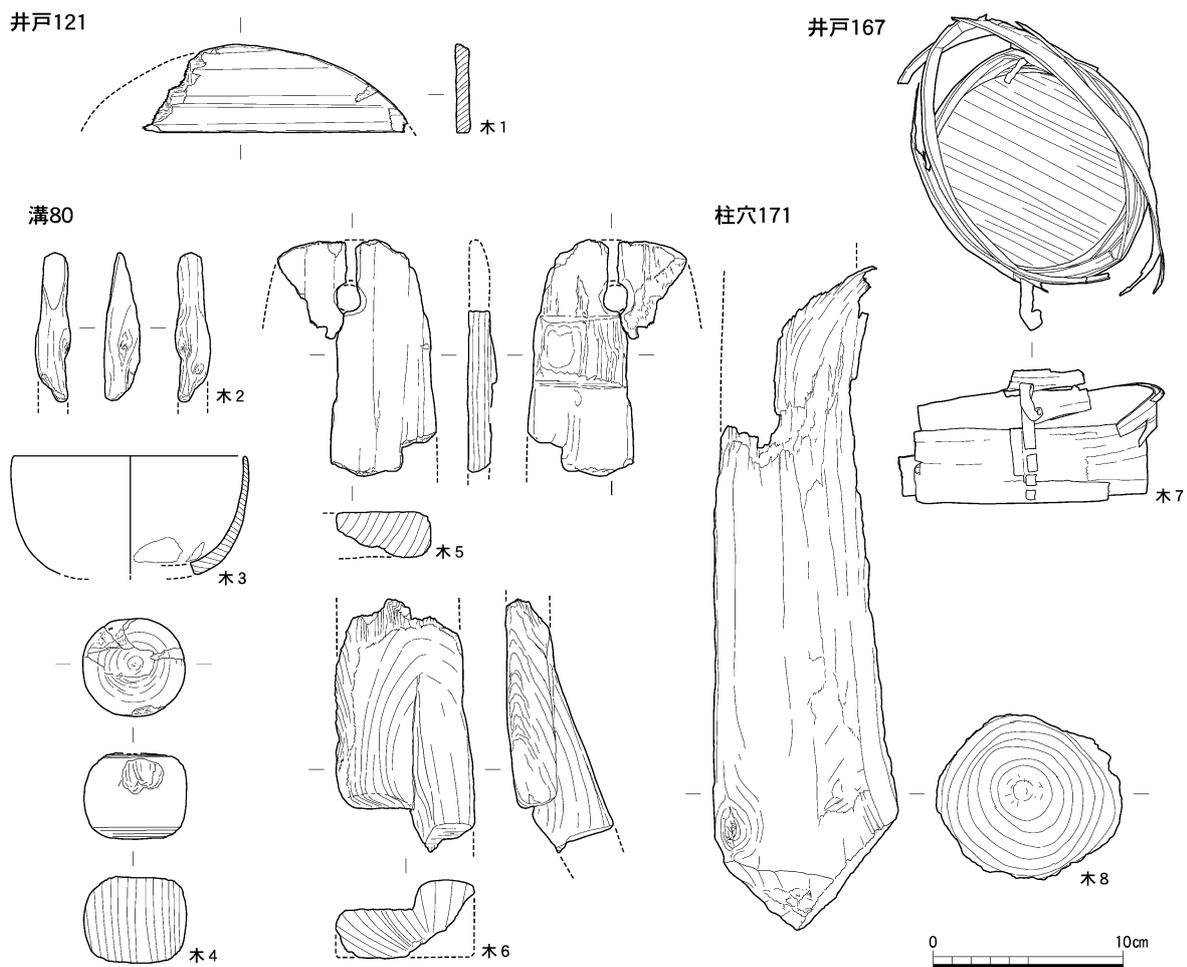


図 25 木製品実測図 (1 : 4)

柱穴 171 (木 8) 柱根で下方を削る。残存長は約 35.0 cmであるが、上部が腐食のため検出時より短くなる。

(7) 自然遺物 (表 4)

その他の遺物として溝 80・井戸 167 から出土した植物の種実がある。

溝 80 は、木本のヒサカキ・センダン・ブドウ属があり、草本ではザクロソウ・ノミノフスマの他にカヤツリグサ属が多い。イネ科およびイネの類はみられない。

井戸 167 は、木本はヒサカキのみで、草本のヒユ属・イネ科が多く、次いでノミノフスマ・ホタルイ属・タデ科が多い。少量ではあるがナス・ウリ類などの果菜類もみられることから、井戸は日常の生活に使用されていることがわかる。

また、溝 80 から昆虫遺体の一部が出土した。

表 4 溝 80・井戸 167 出土植物種実等一覧表

	和名	部位	科名	サンプリング量	約1100cm ²	約1100cm ²	生育場所
				溝80 第3層	井戸167 石組内下層		
木本	ヒサカキ	種子	ツバキ	2	1		庭木・山地
	センダン	核	センダン	1			山野
	ブドウ属	種子	ブドウ	4			山野
	トゲ			1			
草本	ギシギシ属	果実	タデ	2			田畑の畔や道端の湿地・水辺
	タデ科 (三稜形)	果実	タデ	2	8		水辺・湿地・道端
	ザクロソウ	種子	ザクロソウ	15			道端・畑
	ノミノフスマ	種子	ナデシコ	11	12		水田・畑・野原
	ツメクサ	種子	ナデシコ		1		道端
	ハコベ属	種子	ナデシコ		5		道端・畑
	アカザ属	種子	アカザ	1	1		道端・荒地
	ヒユ属	種子	ヒユ	1	29		畑・道端
	キンボウゲ属	果実	キンボウゲ		2		山野・道端
	カタバミ属	種子	カタバミ	1	1		道端・畑
	エノキグサ	種子	トウダイグサ		6		道端・畑
	ウリ類	種子	ウリ	1	2		栽培
	チドメグサ属	果実	セリ		2		道端・庭・野原
	シソ属	果実	シソ	3			道端
	ナス	種子	ナス	1	2		栽培
	ヤブタバコ	果実	キク		1		水田・野原
	イネ科	穎	イネ		21		道端・野原
	イネ	穎	イネ		1		栽培
	カヤツリグサ属 (三稜形)	果実	カヤツリグサ	7	2		湿地・山野
	カヤツリグサ科 (扁平形)	果実	カヤツリグサ		2		湿地・山野
カヤツリグサ科	果実	カヤツリグサ	4	6		水田・湿地・道端	
ホタルイ属	果実	カヤツリグサ	4	10		水田・溝・湿地	
その他	昆虫	頭・上翅・ 胸腹・脚		36	58		

5. ま と め

(1) 遺構の変遷 (図 26)

今回の調査では、次のような調査地の歴史的変遷を明らかにすることができた。

調査で検出した最も古い時期の遺構は、縄文時代の土坑 115・土坑 225 である。土器・石器などは伴わなかったが、出土した炭片の放射性炭素年代測定により、土坑 115 が B.P.4500 ± 30 年、土坑 225 が B.P.4050 ± 30 年の年代を得た。それぞれ縄文時代中期中葉、中期末から後期初頭にあたる。土坑 115 は明黄褐色粘土下面の遺構で、輪郭は不明瞭であるが、上部中央に焼土塊・炭化物が集中して堆積する。遺構の性格は不明であるが、火を焚いた人為的な痕跡と考えている。土坑 225 は黄褐色極細砂下面の遺構で、焼土塊・炭化物は下部中央に集中していることになる。焚火跡あるいは炉跡の可能性を考えている。また、調査区東部では明黄褐色粘土から縄文時代中期後半の土器が出土した。これらの層位的な関係は、古い順に土坑 115、明黄褐色粘土出土土器、土坑 225 となり、年代との矛盾はない。このように縄文時代中期から後期頃と思われる遺構・遺物を認めたことにより、必ずしも頻度は高くないが、断続的に縄文時代の人々が調査地周辺にまで生活の痕跡を残していたことを明らかにすることができた。

縄文時代晩期以降、奈良時代までの遺構・遺物は認めておらず、次に古い時期の遺構は長岡京期の溝・井戸である。溝 31・溝 39 は南北方向に平行する溝で、長岡京東四坊坊間西小路を北に延長した位置近くにある。長岡京復元モデルの数値からは約 7 m 西へずれるが⁵⁾、2つの溝の心々距離は約 9.4 m で小路の路面幅に相当することから、それぞれが東側溝・西側溝にあたる可能性が高いと考えている。また、井戸 121 を検出したことにより周辺に住居などの建物の存在が推定できる。井戸 121 は溝 39 を攪乱しており、周辺からは平安時代前期の遺物が出土していることと合わせて、ある程度の期間にわたって居住が行われたことがうかがわれる。平安時代以降になると、再び遺構は認められなくなるが、室町時代の溝 80 や江戸時代の畦 85 が条里の坪境に当たる位置に存続していることから、この間は条里制が施行され、耕作地としての利用が行われていたことが考えられる。

調査地周辺が最も活況を示すのは室町時代である。室町時代後期を中心に建物・柵・溝・井戸・土坑・柱穴などの遺構を検出した。今回の調査区と 2010 年度 (その 2) 調査区の間には現在の大藪集落東側を区画する水路が南流している。2010 年度 (その 2) 調査 1 区東端では大規模な南北方向の堀 210 が検出された。今回の調査区西壁際で検出した溝 218 がその東肩に当たると考えられ、幅は約 5～6 m となる。この東側には幅約 4 m の溝 105 があり、これらが室町時代の大藪城の東堀に相当するのであろう。溝 105 は溝 218 よりも後の時期まで機能しており、付け替えも考えられる。また、溝 80 は溝 105 への導水に加えて、北側が段差となり高くなっていることから区画溝としての機能も併せ持っていたと考えている。

溝 105・溝 80 の南東側には少なくとも 2 棟の建物が営まれた。柱穴が重複することから何度

か建て替えられたことがわかる。周囲には柵や井戸を伴っている。建物の規模が小さく、溝に近接していることから、あるいは調査区南側に主屋があった可能性が考えられる。一方、大藪城・大藪集落中心部に当たる2010年度(その2)調査の堀210西側では、同時期の堀に区画された多数の建物群や井戸が検出された。東堀を挟んで遺構の粗密は大きく異なり、今回の調査区の検出遺構数はかなり少ない。稠密な状態となった中心部から東堀を越えた外側にまで居住域が拡大した状況が想定できる。

江戸時代になると溝105を残して他の遺構は埋没する。東西方向の畦85を段差として、南側では耕作土が広がる状況を認めた。現代の耕作土により攪拌されていたが、畦85北側も南側と同様に耕作土が広がっていたと判断できる。この後は現在にいたるまで継続して耕作地としての利用が続けられたのである。

(2) 大藪遺跡・大藪城跡の変遷 (図27・28)

今回の調査は、1998年より開始した大藪街路建設工事に伴う発掘調査の東端に当たることから全体の遺跡の変遷を概括しておきたい⁶⁾。

今回の調査では初めて縄文時代中期から後期の遺構を検出した。これまでの調査では、縄文時代の遺構面の面的な調査を行うことができていなかった。今回の調査を契機に今後は縄文時代の遺跡調査を注意深く進めることにより、桂川近くの低地での縄文時代の人々の生活の痕跡が明らかになってくることであろう。一方、弥生時代の遺構は、今年度の調査地よりも西側で竪穴住居・方形周溝墓・濠・溝・流路・土坑・柱穴などを検出している。弥生時代の集落はこれらが広がる範囲を中心としているのであろう。

長岡京の造営は周辺の地域にも大きな影響を与えたことは間違いない。調査地は長岡京復元モデルから約200m北側に位置している。長岡京期の遺構は、1997～1998年度の調査では南北方向に平行する溝と柵・建物・井戸などを検出した。南北方向の溝は長岡京東三坊坊間

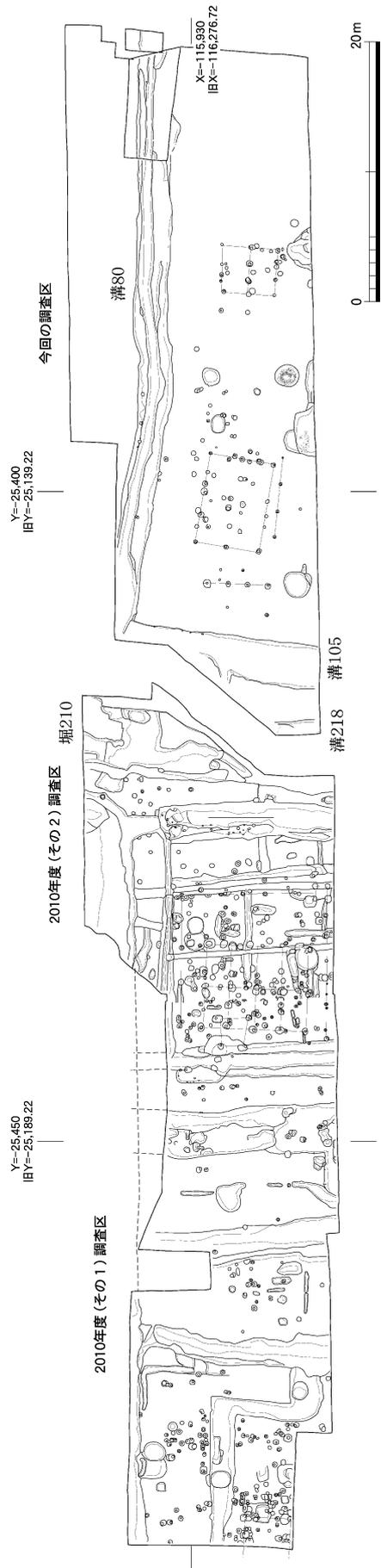


図26 2010年度調査検出遺構平面図 [室町時代] (1:500)

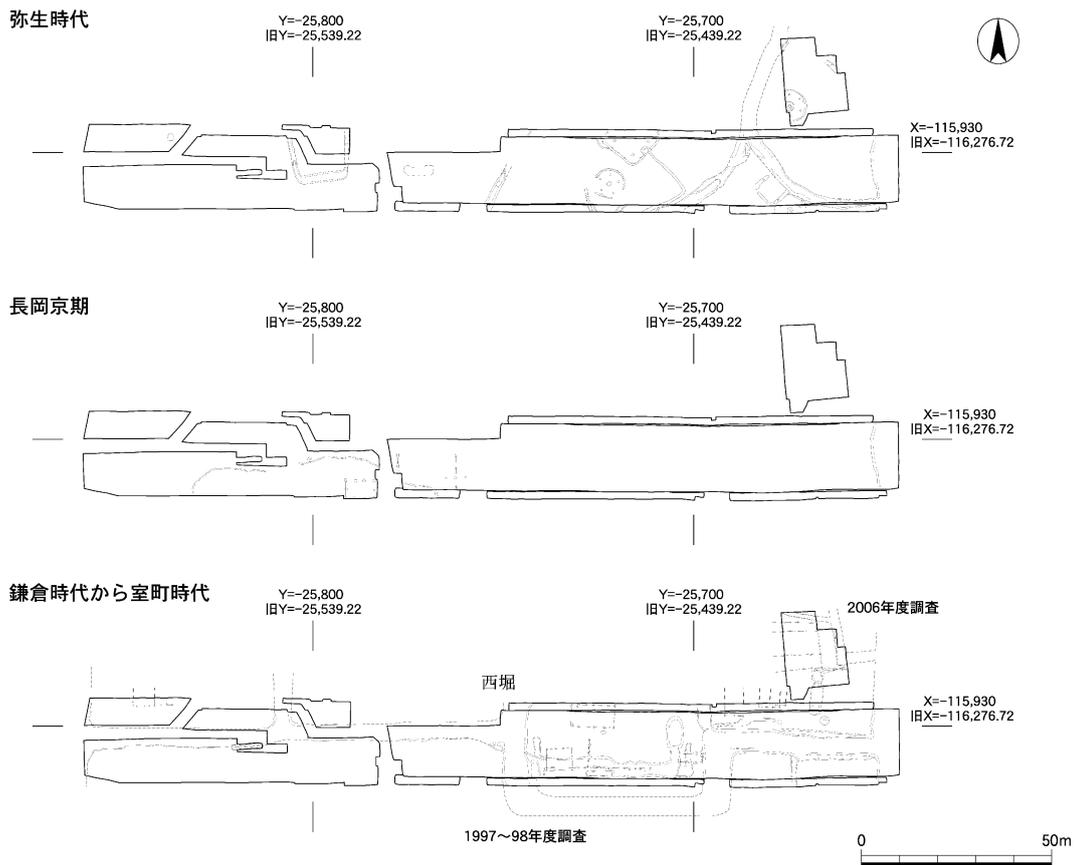


図 27 遺構変遷図西半（1：2,000）

小路を北に延長した位置に当たる。今回の調査では長岡京東四坊坊間西小路を北に延長した東西両側溝に当たる可能性がある溝と井戸を検出した。そのほかの街路の北延長に相当する部分の調査成果をみると、東三坊坊間東小路では西側溝が鎌倉時代から室町時代の堀の位置、東三坊大路は現在の大藪街道に重複し、西側溝が室町時代の堀の位置に当たる。ただし、東三坊坊間東小路東側溝・東三坊大路東側溝の痕跡は認めていない。

また、近年の向日市域の調査により長岡京復元モデルの長岡宮や東一坊北側でも条坊街路を延長した位置に側溝・街路や同時期の遺構⁷⁾が検出されてきている。大藪街路建設工事に伴う発掘調査で検出した東三坊・東四坊北側の遺構と合わせて、これらから長岡京域が現在の復元モデルよりも北側に拡がると結論づけることは、まだ難しいが、少なくとも長岡京北辺域に居住の痕跡が拡がっていたことは確実である。これらの遺構の性格を明らかにするためにも周辺の調査の進展が望まれる。

鎌倉時代から室町時代にかけては、ほぼ全域にわたって多数の遺構が検出される。大藪集落が形成され、大藪城が営まれる時期である。1999年の調査で検出した堀 SD 3 が西堀、今年度の調査で検出した堀 210・溝 218 が東堀になる。特に東側は南北方向に堀・溝が平行することからこれらの中に土塁の存在を推定できる。堀・土塁の内部は東西・南北方向の堀・溝に区画されており、区画内部には堀・門に囲まれた建物群が営まれる。ただし、傑出して大型の建物を認めていないことから、あるいは同規模の屋敷が連続して連なる状況が大藪城の実態であったのかもしれない。

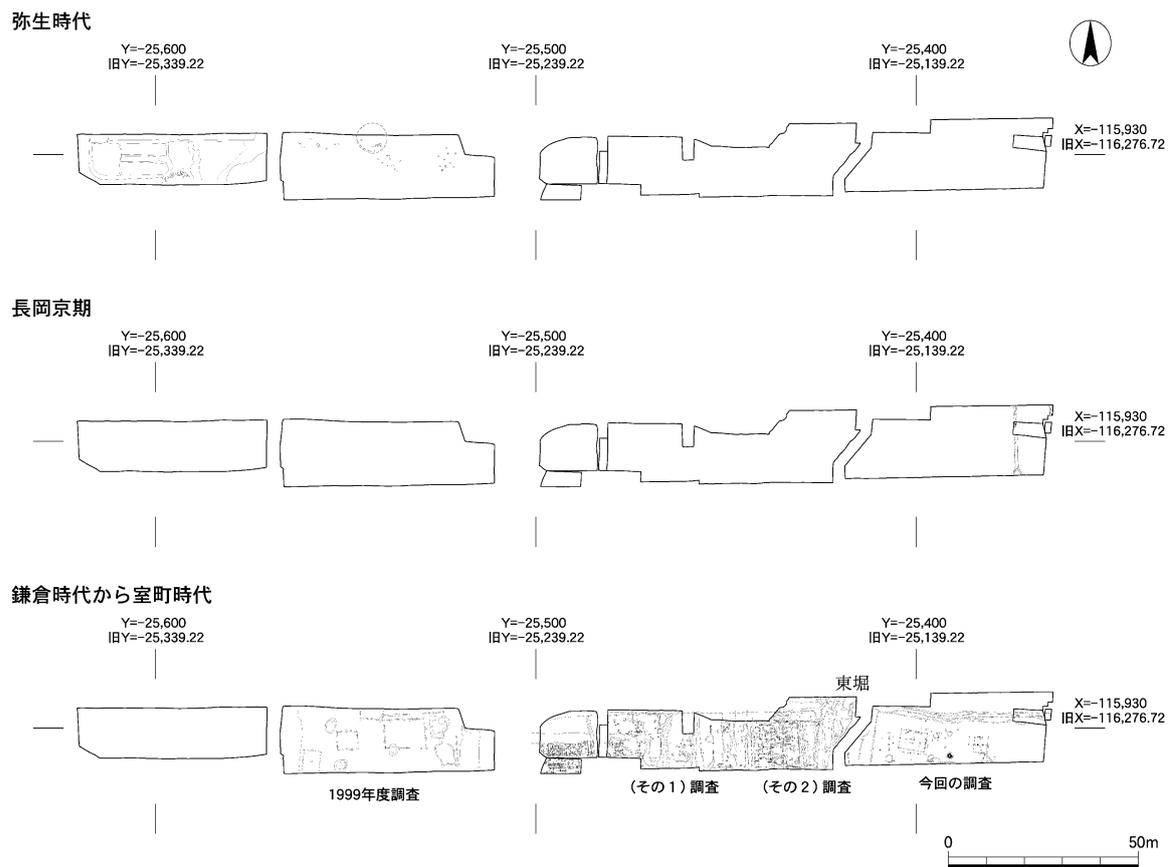


図 28 遺構変遷図東半 (1 : 2,000)

これらの建物群は、それぞれの遺構の時期からみると現在の大藪街道付近から東側へ徐々に範囲を拡げていったようである。特に室町時代後期は遺構が最も密となり、東堀の外側にまで居住域が拡がることとなった。しかし、この状況は一時的なもので、江戸時代になると居住域は縮小し、周囲には耕作地が拡がる景観に移り変わっていったのである。

註

- 1) 『京都市遺跡地図台帳【第8版】』京都市文化市民局 2007年
- 2) 「京都西南部」『土地分類基本調査 地形・地層地質・土じょう』経済企画庁総合開発局国査課 1972年
- 3) 「築山村」『史料 京都の歴史 第13巻 南区』平凡社 1992年
- 4) 山下正男『京都市内およびその近辺の中世城郭 - 復原図と関連資料 -』京都大学人文科学研究所調査報告書 第35号 京都大学人文科学研究所 1986年
- 5) 「長岡京条坊図」『年報 都城』10付録 (財)向日市埋蔵文化財センター 1999年
- 6) 「大藪遺跡」『平成10年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2000年
「大藪遺跡」『平成11年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2000年
『大藪遺跡・大藪城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2010-9 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2010年
『大藪遺跡・大藪城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2010-13 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2010年
- 7) 國下多美樹・梅本康広氏のご教示を得た。

6. 付章 放射性炭素年代測定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の分析調査では、都市計画道路（3・3・132 向日町上鳥羽線）整備事業に伴う埋蔵文化材発掘調査（その3）の発掘調査区で検出された時期不明の土坑の構築年代に関する情報を得ることを目的として、土坑出土炭化材について放射性炭素年代測定を実施する。

1. 試料

試料は、室町時代の遺構の基盤をなす桂川の氾濫堆積物中で検出された土坑 115 および土坑 225 から出土した炭化材各 1 点である。

2. 分析方法

炭化材試料表面の付着物をピンセット、超音波洗浄機を用いて物理的に除去したあと、塩酸と水酸化ナトリウムで洗浄し、試料内部の汚染物質を化学的に除去する（AAA 処理）。

試料をバイコール管に入れ、1 g の酸化銅（II）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30 分）850℃（2 時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素 + エタノールの温度差を利用し、真空ラインにて CO₂ を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製した CO₂ と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを 650℃ で 10 時間以上加熱し、グラファイトを生成する。化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径 1 mm の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV 小型タンデム加速器をベースとした ¹⁴C-AMS 専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS 測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-II）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に ¹³C/¹²C の測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}\text{C}$ を算出する。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma; 68%）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0（Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

なお、炭化材試料は、試料の一部を自然乾燥させた後、木口（横断面）・柁目（放射断面）・板目（接線断面）の 3 断面の断面を作製し、実体顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して樹種同定を行う。

3. 結果

放射性炭素年代測定および暦年較正結果を表 5・図 29 に示す。同位体補正を行った年代値は、土坑 115 の炭化材が 4500 ± 30yBP、土坑 225 の炭化材が 4080 ± 30yBP を示す。暦年較正年

表5 放射性炭素年代測定および暦年較正結果

地点	状態・種類	測定年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正年代 BP	暦年較正結果				Code No.
					誤差	cal BC/AD	cal BP	相対比	
土坑115	炭化材 アカガシ亜属	4510±30	-26.19±0.46	4500±30 (4504±30)	σ	cal BC 3,338 - cal BC 3,285	cal BP 5,287 - 5,234	0.168	IAAA-103798
						cal BC 3,295 - cal BC 3,285	cal BP 5,244 - 5,234	0.058	
						cal BC 3,275 - cal BC 3,265	cal BP 5,224 - 5,214	0.055	
						cal BC 3,239 - cal BC 3,207	cal BP 5,188 - 5,156	0.212	
						cal BC 3,194 - cal BC 3,148	cal BP 5,143 - 5,097	0.288	
					2σ	cal BC 3,141 - cal BC 3,106	cal BP 5,090 - 5,055	0.218	
						cal BC 3,349 - cal BC 3,261	cal BP 5,298 - 5,210	0.347	
						cal BC 3,255 - cal BC 3,097	cal BP 5,204 - 5,046	0.653	
						cal BC 2,856 - cal BC 2,812	cal BP 4,805 - 4,761	0.296	
						cal BC 2,747 - cal BC 2,725	cal BP 4,696 - 4,674	0.151	
土坑225	炭化材 アカガシ亜属	4120±30	-27.95±0.54	4080±30 (4075±28)	σ	cal BC 2,698 - cal BC 2,624	cal BP 4,647 - 4,573	0.553	IAAA-103799
						cal BC 2,866 - cal BC 2,804	cal BP 4,815 - 4,753	0.266	
						cal BC 2,775 - cal BC 2,770	cal BP 4,724 - 4,719	0.008	
					2σ	cal BC 2,762 - cal BC 2,579	cal BP 4,711 - 4,528	0.726	
						cal BC 2,856 - cal BC 2,812	cal BP 4,805 - 4,761	0.296	
						cal BC 2,747 - cal BC 2,725	cal BP 4,696 - 4,674	0.151	

- 1) 処理方法は、酸処理-アルカリ処理-酸処理(AAA処理)である。
- 2) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。
- 3) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。
- 4) 暦年の計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0 (Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer)を使用した。
- 5) 暦年の計算には、補正年代に()で示した、一桁目を丸める前の値を使用している。年代値は、1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、暦年較正用年代値は1桁目を丸めていない。
- 6) 統計的に真の値が入る確率は σ は68%、 2σ は95%である。相対比は、 σ 、 2σ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

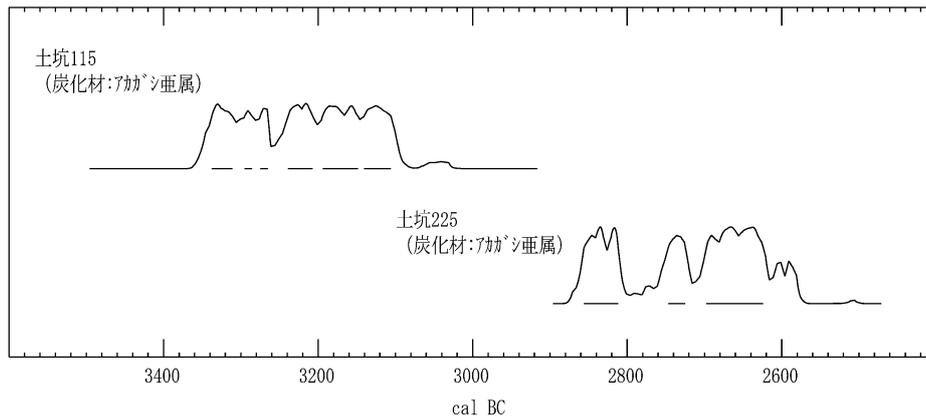


図29 暦年較正結果

代は、測定誤差 2σ の場合、確執1位の値で土坑115の炭化材がcal BC 3255-3097、土坑225の炭化材がcal BC 2762-2579を示す。なお、測定対象とした各土坑出土の炭化材は、いずれもアカガシ亜属に同定された。以下に解剖学的特徴を記載する。

- ・コナラ属アカガシ亜属 (Quercus subgen. Cyclobalanopsis) ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高のものと複合放射組織とがある。

4. 考察

今回調査を行った土坑115と土坑225から出土した炭化材の放射性炭素年代測定値(補正年代値)は、土坑115が4500±30yBP、土坑225の炭化材が4080±30yBPを示した。これらの年代値は、今回の調査地周辺で実施された土器付着物などの放射性炭素年代測定値(西本編2006・2007)に基づくと、土坑115が縄文時代中期中葉、土坑225が縄文時代中期末～後期初

頭に比定される。また、土坑 115 と土坑 225 では、多少の年代差が生じている可能性がある。ただし、年代測定対象が燃焼後の炭化材片であり、伐採年を示す最外年輪の測定値ではないことから、利用された年代より古い値となっている可能性があることを考慮しておく必要がある。

土坑 115 と土坑 225 は、いずれも氾濫堆積物中で検出されているが、この氾濫堆積物中には顕著な土壌生成層準が認められず、氾濫堆積物の堆積が進行する、氾濫原の発達時期に構築された遺構であることが層相からうかがえる。したがって、縄文時代中期後半の調査区は、洪水の影響を受ける氾濫原の堆積環境にあり、そのような場所で人間活動が認められたことになる。

一方、土坑内から出土した炭化材はアカガシ亜属に同定された。アカガシ亜属は、暖温帯の適潤地からやや湿潤な場所や降水量の多い地域に極相林として発達する常緑広葉樹の高木である。樹種によって生育地が多少異なり、イチイガシは比較的水分含量の多い場所に生育しており、アラカシは萌芽能力が高いことから二次林でも認められる。また、アカガシ亜属の木材は比較的重硬で強度が高い材質を有する。京都盆地における古植生の検討結果を見ると、暖温帯常緑広葉樹林（いわゆる照葉樹林）の主要構成要素であるアカガシ亜属が分布拡大するのは、約 7,300 年前の鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）降灰以後とされている（前田,1984 など）。今回の結果は、年代的にみて矛盾しておらず、縄文時代中期後半の調査地点周辺にはアカガシ亜属が生育する比較的安定した領域が存在したことが示唆される。

引用文献

前田保夫,1984,花粉分析学的研究よりみた近畿地方の洪積(更新)世後期以降の植生変遷.宮脇 昭(編著),日本植生誌 近畿,至文堂,87-99.

西本豊弘 編,2006,新弥生時代のはじまり 第1巻 弥生時代の新年代.雄山閣,143p.

西本豊弘 編,2007,新弥生時代のはじまり 第2巻 縄文時代から弥生時代へ.雄山閣,185p.

版 图

報 告 書 抄 録

ふりがな	おおやぶいせき							
書名	大藪遺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2010-18							
編著者名	山本雅和・田中利津子							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2011年6月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おおやぶいせき 大藪遺跡	きょうとしみなみく 京都市南区 くぜつきやまちょうちない 久世築山町地内	26100	773	34度 57分 17秒	135度 43分 19秒	2011年1月 6日～2011 年3月31日	853.5㎡	道路整備 事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
大藪遺跡	集落跡	縄文時代	土坑	縄文土器		縄文時代の遺構・ 遺物を検出した。 長岡京東四坊坊間 西小路北延長の可 能性がある溝を検 出した。 大藪城跡東堀外側 の状況が明らかと なった。		
		長岡京期	溝、井戸	土師器、須恵器、緑釉 陶器、灰釉陶器、輸入 磁器、瓦、石製品、木 製品				
		室町時代後期	建物、柵、井戸、 土坑、溝	土師器、瓦器、焼締陶 器、施釉陶器、輸入陶 磁器、金属製品、石製 品、木製品				
		江戸時代	耕作溝、溝、畦、 土坑	土師器、焼締陶器、施 釉陶器、磁器、瓦、金 属製品、石製品、木製 品				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2010-18

大 藪 遺 跡

発行日 2011年6月30日

編 集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
発 行

住 所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1
〒 602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印 刷 三星商事印刷株式会社

住 所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地
〒 604-0093 TEL 075-256-0961